

史鬪苦間

KH384

326

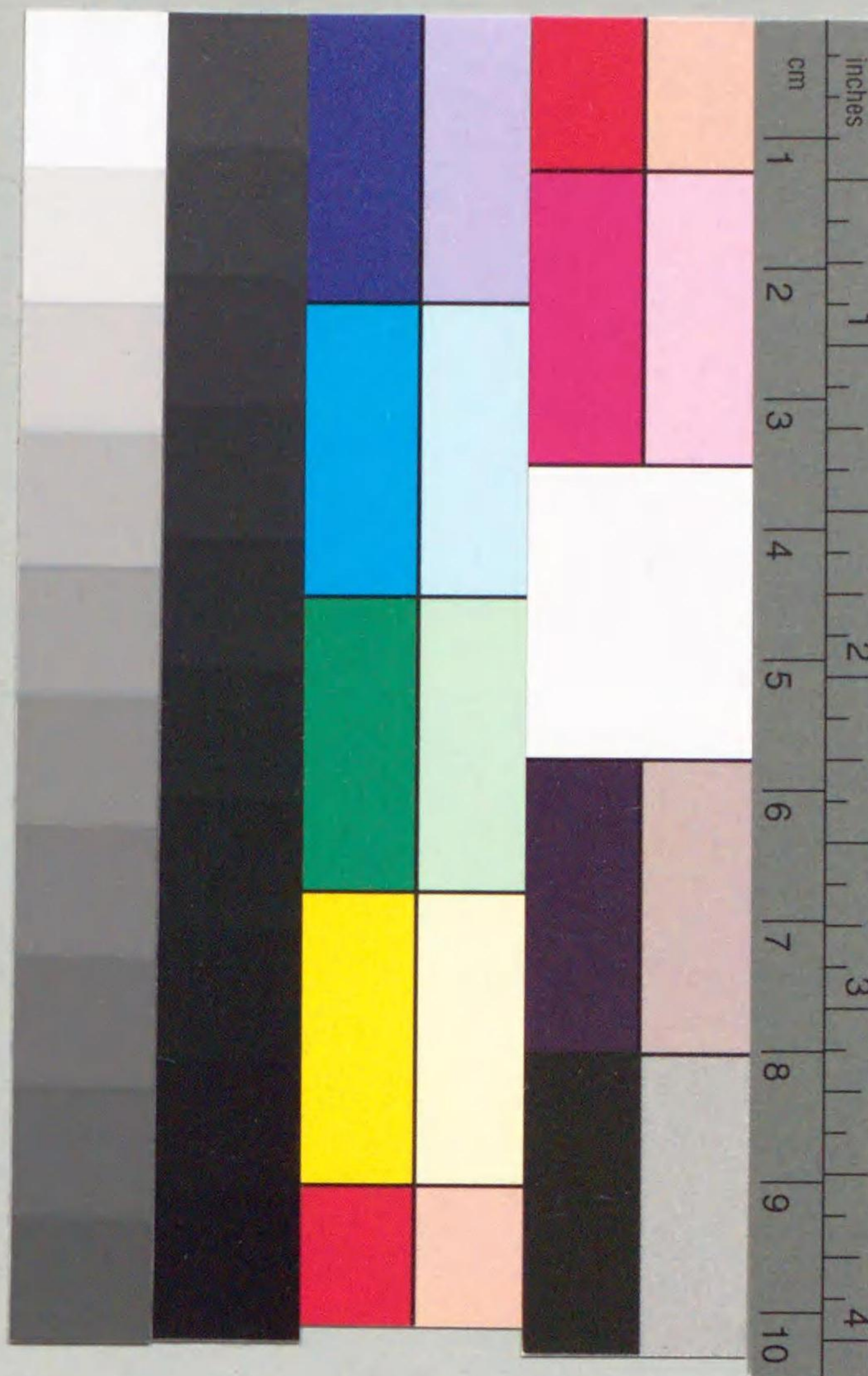


83W53087



著風梢松村

版



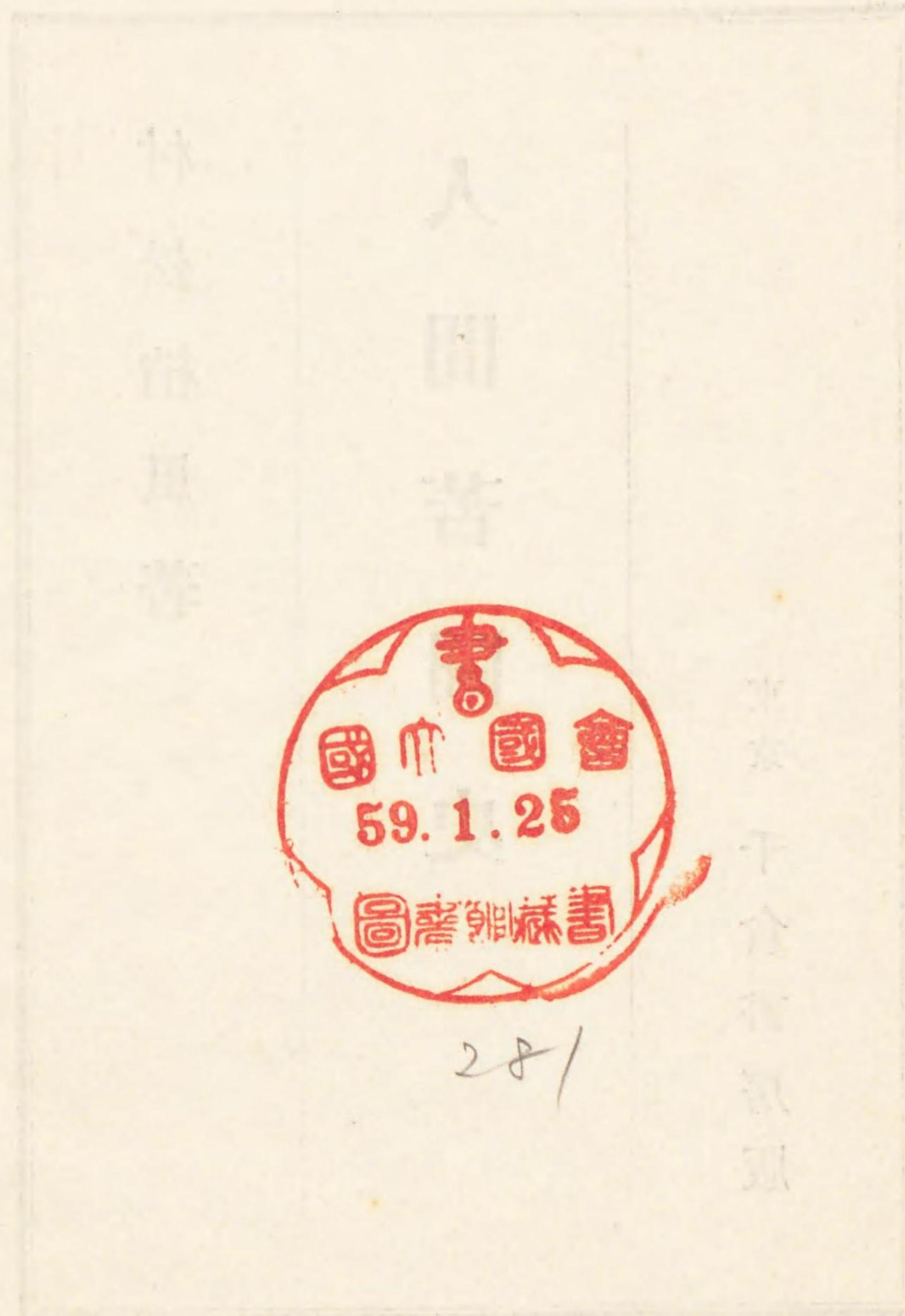


村松梢風著

人間苦闘史

東京千倉書房版

KH384
326



83W53087

序

本書は、いはゆる立志傳ではない。

若くして志を立て、其の目的を貫徹して、立身出世する迄の間に
いかなる艱難や苦境に直面したか、運命を切り拓くために、どれだ
け奮闘努力したかといふ、世の成功者の實驗談を聞かせやうとする
ものではない。

では、本書は何を語らうとしたのか。何事を讀者に訴へやうとし
たのであるか。著者は一言次のやうに答へる。

『彼はどんなに苦闘したか。』

序

一

たゞ、それだけだ。

成功、不成功、そんなものは問題ぢやない。一人の人間が此の世に生れて来て、成長して行くために、どれだけ澤山苦しみ闘つたかといふことを、知つて貰へば満足である。

世の中にはあるひは、それ程苦闘せずして立身出世する人もあるかも知れない。觀やうに依れば其の人は幸福である。が、苦闘を経験せざる人生は、尊い人生だとは云はれない。

本書に載せられた人々は、おのゝ職業上の差別があり、社會的地位も必ずしも一列ではないが、夫れゝ其の方面に於ける大家である。然し、假りに此の人々が、今日の地位や盛名を得ずして一生

を終ることがあつたとしても、尊敬すべき人である點に於いて何等變るところはないのである。
『彼はどんなに苦闘したか。』
それだけで十分だ。

昭和九年中秋

村 松 梢 風

人間苦闘史 目次

秋山定輔 (一)

武藤元帥 (四)

服部金太郎 (七)

横山大觀 (二三)

關根金次郎 (四三)

本因坊秀哉 (七一)

目次

狩野芳崖

(二〇九)

旭玉山

(二四六)

長谷川伸

(二七五)

澤田正二郎

(三〇九)

溥儀皇帝

(三三二)

目次終り

秋山定輔

(一)

凡そ世に名をなした人の半生は、殆んど苦闘の歴史でないものはない。然し、茲に私が語らうとする、秋山定輔ほどの苦闘史は、幾十人かの人の傳記を書いたが、嘗つてこれほどの苦闘をした人を知らない。

秋山定輔は、必ずしも大政治家とは云はない。殊に、最近の若い人達には、既に忘れられた人の名かも知れない。けれども政界の裏面に未だに大きな存在として、陰然たる勢力を持つてゐることは事實である。

そして、この人の場合、世にありふれた、所謂立志傳でない。秋山定輔その人が假りに一個無名の存在であつたとしてもこの苦闘の半生、否全生涯は、立派な人間記録である。彼は嘗つて私にその平生を語り出すに際して、

『私は自分の傳記を、世の身分ある家の子弟や、金持富豪の子弟に讀んで貰ひたくない。

私の生涯は殆んど貧乏の生涯である。従つて私の傳記は一種の貧乏歴史だとも云へる。』と語つた。

(二)

で、私が秋山定輔のことは、人間が貧乏を如何に克服し得るかと云ふ、人間苦闘史と云ふよりも、貧乏征服史であるとも云ひ得る。

先づそれは秋山定輔の母方の貧乏から始まる。大抵の場合、如何に家が貧乏であつたとしても、多く、以前は樂に暮してゐたとか、或は主人が金を散じ過ぎて貧乏になつたとか何かしら貧乏と調和しない名残のやうなものがあつたり、尠くとも貧乏の原因となるものが人に知られる程度にあるものであるが、彼の家に限つては何もそんなものがなかつた。最初から最後まで、ことごとく同様な、貧乏の連続であつた。

秋山定輔の故郷は、備中倉敷町である。倉敷は舊幕時代に天領の地であつた。天領と云

ふのは領主がなくて、幕府直轄の地で、代官が爲政者である。

秋山の母の生家は、その倉敷の町端れに近い、水香百姓の家であつた。その家の墓には二百年以來の墓があつた。姓は宇野と云ひ阿波屋と云ふ屋號であつた。

阿波屋と云ふ處から見ると、祖先は四國の出入りしと思はれる。或は四海通路か、流浪の旅の途中に、その土地に留るやうになつたのかも知れない。だが、系圖も何もないから、祖先の事は判らない。

たゞ判つてゐることは、宇野家は二百年以來其處に住まつてゐて、未だ曾つて、一反の田地も所有つたこともなければ、家も昔から現在の通りで、大きくもならなければ、さりとて是れ以上小さくなりやうもなく、ほんとうに貧しい、さゝやかな生活を送つて來たと云ふだけのことである。

だから、代々宇野家の人々は、二百年間、じつと貧乏の底に、浸つて來た人々である。その家には秋山定輔の叔母や、年取つた祖父が居た。他家の田地や畑を借りて百姓をや

つて生計をたてゝゐるが、その家の人達は一家を擧げて大師信者であつた。先代も、その先代も同様に厚い信者であつた。

よくその家には、四國遍路の見知らぬ旅の人が泊つてゐた。又、大師講の人々が集つては御詠歌をやつたりしてゐた。

順禮に宿を貸したり、講中の人々に飯を振舞つたりすることは、どんな貧乏の中でも、苦痛としないのであつた。否、苦痛どころか、それがその家の人々の唯一無上の楽しみになつてゐたらしかつた。

阿波屋と云へば、貧乏と大師凝りとの二つで、その土地で知られてゐたのである。

祖母は、貧乏な百姓の家に似合はしからぬ、色の白い上品な顔立ちの人であつた。そして、何時も、靜かに絲繰車を廻はして、絲を紡いでゐた。

幼い定輔が遊びに行くと、祖母は、何處に納つてゐるのかは知らないが、何時でも、錢を一厘出してくれた。その頃の一厘には二種類あつて、ガラ錢と云ふのは鐵で出來てゐて

その外に文銭と云ふのがあつた。

文銭の方がすつと値打があつたのである。祖母はそれを、定輔に渡す時には、

『それは文だぞ』と云つた。

定輔はその錢を貰ふと、川崎屋と云ふ店へ行つて、土器の上に、豆を十粒ばかり竝べたのを買つた。

祖母は、絲を紡ぎ乍ら、妙な節をつけて、唄ともつかず、獨り言とも付かず、

——一町、持つたら、大百姓

そう云ひくするのであつた。

定輔は、度々その唄を聞くので、祖母にその意味を訊いた。

『それは喃、家は貧乏だけれど、田地の一町も持つやうになつたら、宜からうと云ふことじやい喃』と云つた。

定輔は幼な心に、一町がどれ位の田地かは知らなかつたが、

『おばあ、わしが大きくなつたら、買つてやらうか。』と云つた。

祖母はその言葉を聞くと、涙をこぼした。

『この兒が、大きくなつたら、田地一町、買つてくれるさうな。』
逢ふ人に、祖母は淋しく笑ひ乍ら語つた。

(三)

定輔の父は秋山儀四郎と云つた。

父の家は遠く廻れば武士の出であつた。祖先は宇喜多の家臣で、久しく天城の片原と云ふ處に居たが、後に倉敷に来て住むやうになり、大小を捨て、町人になつた。で屋號を天城屋と云つて、商賣は味噌醬油を商つてゐた。ま、云はゞ、由緒のある家であつた。

だが、定輔の少年時代は、父方の家に餘り親しみを持たなかつた。それは何故かと云ふと、父は天城屋の二男で、母と結婚すると、別に家を持ち、定輔の姉を生み、次いで定輔

を生んだが、定輔は天城屋で生れたのではなかつたからである。

天城屋は、間口の広い格子造り、屋根には重さうな瓦が乗つてゐたし、広い土間に竝べ
てある大樽、客に出す黒塗の膳、裏庭の土藏の前にある梨の木、藏の屋根の下にあつた蜂
の巢、そんなことがかすかに、定輔の思出には残つてゐる。

けれども、本家の天城屋も、その頃にはもう家運は傾いてゐた。黒光りのする柱の大き
な家の、何となく廢頽して行く空気を、幼な心にも感じて、定輔は、本家よりも、矢張り
自分の家の少さくて貧乏だが明るい生計を幸福に感じてゐた。

父と母とは同年であつた。定輔は両親が等しく二十三の年に生まれた。

父は、若い頃風雲をねらふと云ふ風な性であつた。商人が嫌ひで、時勢は恰も、維新に
際會してゐたから、風雲に乗じて天下に志を成さうと云ふ氣概を持つてゐた。

武田耕雲齋が、備中に來た時は、その徒黨に加はらうとさえしたほどの人であつた。け
どれも、當時は、武士でなければ、醫者、僧侶でもなければ、志士の仲間入りは六つか

しがつた。

尋いで鳥羽伏見の亂にも、定輔の父は、軍に投じやうと試みたが、矢張り駄目であつ
た。

『學問は俺の讐敵だ。お前は學問をして、父の敵を討つんだぞ。』

遂に青雲の機を得なかつた父は、少年時代の定輔に語つた。

青雲に乗ずることを得ない父は、貧乏でも平氣な生活を續けてゐたので、世帯を切り廻
はす母は辛らかつた。定輔が腹にある時に、母は、窺かに決心した。

『この上に、子供が生れては、離縁することも出来ない。』

可愛相だが、暗に葬つた方がましかと考へて、藥を呑んだり、屋根から飛び降りて見た
りしたが、矢張り生あるものは、生れ出た。それが、今日の秋山定輔であつて、時は明治
元年であつた。

(四)

欲せざるに生れた子は、口が利けなかつた。それも六歳の時になつて、不圖したはずみから口が利けるやうになつた。

その頃、父は家に居なかつた。岡山、大阪などを放浪し、定輔は、母と倉敷町の弓場と云ふ處の寺の下に住んでゐた。

そこは貧民窟であつたが、一歩出ると目抜きの本町通りがあつた。定輔の家は、貧民窟と本町との恰度境ひにあつた。

偶然の機會が、貧富の境目で、少年時代の秋山定輔の還境を與へた。

物心がつく頃、一家は母の足袋の内職をして、僅かに一家を支へてゐた。母は一晩に、三十足を縫つた。定輔と姉は、足袋の紐を作つて助けた。まだコハゼのない頃である。

足袋が出来上ると、夜、定輔がそれを背負つて問屋まで持つて行つて、母はお高僧頭巾

を冠つて定輔と一緒に歩いた。問屋までは半里もあつたが、お宮の脇に、夜になると出る屋臺店の大福餅の、濫く焼き立てのを、一個買つてくれた。餅の値は五厘であつた。

足袋の内職は冬だけなので、仕事のない時には高機を織つた。これは近所の誰彼からの注文を受けて、人よりも安くしたので、可なりの注文で忙がしかつた。

一時は腹の中で始末をしやうとさえさしかけた息子ではあつたが、母は貧苦の間にも、子への愛は深かつた。だから定輔には、貧乏の苦よりも、母の愛を深く感じて幸福であつた。

十四の時に、母の膝下を離れて、七十に近い現在まで、顧みて一番幸福な時は、『母と共に暮した、少年時代だ。』と秋山氏自身が述懐するのである。

定輔は、その少年時代に、本家の庭に實つた梨を盗んだことがある。その後、母の貧しい金を一錢盗んだこともある。

母が戸棚の上に置いた錢であつたが、母は金のなくなつたことは知つてゐた。それを自

分にも感じて定輔は、後悔した。祖母から、一錢を貰つて、何氣ない風に、紛失した金が偶然發見されたやうにして、

『あ！ 母さん、こんなところに一錢、ある。』と差出して見せた。

母は思ひ出したやうに、サメザメと泣いた。それは、我子が、母の金を盗んだと思つてゐるが、そうでなかつたことを知て、感極まつたのであつた。

定輔は、遂に、母に盗んだ——と云ひ得なかつた。二十三になつて、大學を卒業したとき死んだ。

自分の子は、貧乏だが盗みはしない——と信じて。

(五)

岡山縣は早くから教育が普及してゐたので、明治十一年には立派な小學校があつた。

新規に、學校が出来て、六百人を收容する、その開校式に、定輔は生徒總代として答辭

を讀まねばならなかつた。それには、羽織袴が必要であつたが、羽織がなかつた。母が何處からか借りて來たのを着て出た。その羽織は大變大きくて、定輔の手は袖の中にかくれて了つた。定輔は、袋のやうな羽織を着て、朗々と答辭を讀んだ。讀み方が良かったと、先生達が賞めた。

開校記念の祝ひに、生徒の作品を掛行燈にして町へ懸けた。母は、日が暮れると、御高僧頭巾で顔を包んで何處かへ出掛けて行つた。

母は、窃かに、自分の息子の掛行燈の評判を聞いて、人の賞めて呉れるのを、じつと聞耳を立て、喜びに顫へる胸を抑へてゐたのであつた。

十三の時に岡山の中學へ入らうと思つて、受験準備に掛つたが、試験の課目は、日本外史、十八史略、國史略の三書であつた。外史と、國史略は既に讀んでゐるが、十八史略はまだ讀んでゐなかつた。どうしても、それを讀まなくてはならないので、古本屋を探すと一圓九十錢だと云つた。父にその話をする

『うん、よし』と云つた。そして何處かへ出かけて行つたが、歸つて來ると財布のなかゝら金二圓を出してくれた。

『俺は、あんなに困つたことはなかつた、二圓の金を作るために、岡山中を駆け廻つた。』と後になつて父は述懐したと云ふことである。

中學へ入つたが、月謝が納められない、悄然と倉敷の家へ歸つて來ると、珍らしく父が居た。

『何で、今頃歸つて來た。』と父が云つた。

『月謝が二ヶ月滞つてゐて、退學になるんです。』と答へた。

父は暗然とした。

『おい』と母を呼んだ。着てゐたドテラを脱ぐと、

『これに、家にあつただけの品物を集めて、金を拵えて來い。』と命じた。

父は、ドテラの下に薄い單衣を一枚着た切りで、寒さうであつた。

定輔は、母が持つて歸つて來た金を前にして、シクシク泣いてゐた。

『何を泣く、まだ金が足りないか。』と云つた。

『でも、お父さんが寒さに顫へてゐるのに、僕は學校へなぞ行けません。』

『馬鹿なことを云ふな、着物位は、拵えやうとすれば、何時でも出来る。學問はさうは行かぬぞ、さ、早く行け。』

父は叱るやうに云つた。

(六)

岡山の中學は、藩の學校を中學に返したので、師範も一緒であつた。時の校長は駒井重格、教頭は鄭永慶と云つた。二人ともアメリカ仕込で、エール大學の出身、田尻稻次郎、鳩山和夫等と同窓だつた。

定輔は、鄭教頭の學僕となつた。鄭教頭は當時特命全權公使をした鄭永寧氏の息で、有

名な鄭成功の後裔と云はれてゐた。

定輔は、その鄭教頭の、云はゞ小使みたいなものであつた。

或晩、鄭先生の家に、福井友三郎と云ふ友人が訪れた。その人は文學士で、後に大阪商業學校の校長になつた。

主客は奥の座敷で旺んに談笑してゐた。十二時が過ぎたけれど、一向に福井さんは歸らうともしない。定輔は眠くてならなかつた。

机に凭れて、うとくとしてゐると、大變な騒ぎが起つたので、目が醒めた。

パツと、火が燃えてゐる。メラ／＼と障子を這ふ焰が天井に届きさうで、パチ／＼と音がしてゐる。

鄭先生と、福井さんが、襖を蹴破つて、消し留めた。火は幸ひに留つたが、自分の机の上にあつた、ランプを居眠りで落して、騒ぎを起したらしかつた。

恐れ入つて、後を掃除したりしてゐると、

『君、一寸来い。』

鄭先生の聲が叫んだ。

ハツと思つた。悄然と先生の座敷に出て、死刑の宣告でも受ける氣だつた。

『秋山、君は、東京へ出て勉強しないか。』

意外に、柔さしく、然かも、豫期しない言葉であつた。

『實はな、私も、近い内に學校を辭めて、東京へ行く、何なら、伴れて行つても好い。』
大變な失策を叱らうともせず、然かも、思ひ設けない言葉に、定輔は、夢かと疑つた。

一ヶ月の後に、父も大賛成で、鄭先生に伴はれて東京へ出た。明治十五年の六月であつた。共に、吉田、井上と云ふ書生も、鄭先生の許に養はれた。

鄭家は、下谷黒門町にあつた。舊幕府時代から残つてゐる大きな邸であつた。

高橋是清が校長をしてゐた神田の共立英語學校へ通つて、大學豫備門への準備をした。

無理をして勉強するんだから、良い成績を挙げやうと、勉強をして、御成街道の大時計の下で往來に卒倒して了つたことさえあつた。

翌年には大學豫備門に入れた。その時同郷の岡山から上京して受験した者は四十人以上あつたが、及第したのは、岡喜七郎と奥山岩三郎と秋山定輔の三人であつた。學校では、床次竹二郎、服部宇之吉、大森房吉が同級となつた。

鄭先生には兄弟が澤山あつた。父君永寧氏のお妾に、お勝さんと云ふのがゐて、これが本妻同様に家庭を切廻してゐた。お勝さんは、何でも、以前は吉原でお職を張つたとかで萬事がさう云ふ人らしい家事振りであつた。

定輔が脚氣を病んだことがある。するとお勝さんは、

『秋山さん、脚氣にはね、股引を穿くと一等好いんですよ。』

そう云つて、國元から少し宛送つて來てゐる金を、預けてある中から、勝手に股引を買つてくれた。四十錢だつたのである。

定輔は、四十錢と聞いて、ビックリして了つた。四十錢と云ふ金は、國許で、母が格子縞を二反織つて得る金である。

『勿體ない。』

定輔は、心で呟き乍ら、その股引を、そのまゝ、机の抽出に納ひ込んで了つた。

『ちよいと、秋山さん、折角の股引、何故穿かないの。』

度々お勝さんから問はれて、定輔は、そのことを語つた。

『まア、呆れたよ。』

お勝さんは黙つて了つたが、それからお勝さんは定輔には好意を持たなくなつた。

國からの仕送りは一年ほど經つと途絶えたので、労働をする外はなくなつた。労働と云つても、その頃は、人力車を挽くより外はなかつた。

御徒町の片桐と云ふ俣宿へ行つて、親方に逢つた。

『サアね、その身體じや、危えもんだが、まア、やつて見なさい。』

そこで、その俸宿の二階へ下宿して、曳子になつた。

晝間學校へ通つて、夜働くのである。他にも曳子が三四人居たが、苦學してゐるのは、定輔だけであつた。その頃、合箱(二人乗)と云ふのが、日に八錢、一人乗が六錢の損料であつた。

稼いだ金の内から、俸の損料と下宿代を親方に入れると好いことになつてゐたので、仕事にあぶれても、食ふには困らなかつたが、人力を曳くと云ふことは、仲々六つかしいことで、最初のうちは、空俸を曳いて稽古をして、だん／＼に客を乗せて見るのだが、まだ十七だつたし、元來丈夫でないのだから、無理であつた。

とう／＼、親方の馴染客を乗せて、三橋まで曳くと、途中で足が動かなくなつて、お客に降りて貰はねばならなかつた。

『誰でも、一度は。床につくんだよ。』

親方のおかみさんが、慰めてくれたが、

(七)

『病氣になつちや仕様がな。』と決心して止めることにした。

鄭先生の家に一緒にゐた、吉田と云ふ男は、父が郡書記をしてゐたので、月々五圓宛の學費が来たが、充分でないので、共に苦學することになり、吉田は、その僅かな學費を割いて秋山と共に自炊生活をしてくれることになつた。

そこで、御徒町のメンコ屋の二階を借りた。部屋代は三十錢であつた。長屋で、半分つぶれ相な家で、家に突かひ棒が幾つもあるたので、定輔は、それを洒落れて、『斜窓房主人』と號したりした。

お茶は、火鉢で煮る。飯はメンコ屋の婆さんから釜を借りて炊いた。その代りに婆さんには、借賃の代りに、一町ほどある井戸から、桶に水を六杯宛汲んでやる契約になつてゐた。

その水汲みが仲々つかつた。すると、矢張國から来た友達で、日置と云ふ男が、定輔に英語を教はりに来た。そこで、定輔は、月謝の代りに水汲みを代つてやらせることにした。

吉田の僅かな學費を食つてゐることは、如何にも心苦しかつたので、何か金を得たいと思つて、巻煙草を巻きに通つたが、不器用なので斷られた。日置が、その様子を見兼ねて『僕の先生に、君のことを話してあるから、一度行つて見ないか。』と云つてくれた。

日置の先生と云ふのは、『やまと』新聞を興した、條野傳兵衛のことで、これは明治初期文壇には知られてゐる。雅號を、山々亭主人、または、採菊山人と云つた。假名垣魯文の友人で、當時有名であつた。その人は橋場に住んでゐた。

秋山は、日置の言葉に勇躍して、屢々訪問したが、三回目に面接してくれたが、『目的は?』と聞かれて、『政治家ですが、目下はそんなことより、當家の食客にして戴きたいのです。』

そこで、貧乏な話を一くさりやると、採菊先生は、

『ハア、く』と氣のない返事をしたが、

『判つた。併し、私も、別に金の成る木を持つてゐないから、赤の他人さんの御世話は出来ない。』とキツパリ斷つた。

後に、秋山定輔が、帝都に二六新報を興して、日の出の勢であると、人を介して、

『知人に、條野といふ人がある。非常に債權を負つて困つてゐる。その債權者は、貴方の知人だから、貴方から一寸口添へしてくれないか。』と云ふのであつた。

何氣なく引受けて、條野と云ふ人に逢ふと、その人は、往年の條野採菊であつた。

秋山定輔は、當時を思ひ出したが、條野はそんなことを知らなかつた。が、秋山定輔は黙つてその窮境を救つた。

(八)

澁澤榮一は、當時秋山が、ふいと考へて、天下の金持だと直ぐ、名が浮ぶほどだつたので、或日、天下の金持なら——と考へて、書生らしい單純さで訪問した。何時も玄關拂ひだつたが、根氣よく十幾遍目かに訪問すると、始めて逢つてくれた。

主客相對して見ると、つい、

『どう云ふ御用件で……』と天下の富豪にきかれて、十幾回目かに得た面接のチャンスだが、うか／＼と、

『唯、お目にかゝつて見度くて上りました。』
と答へて了つた。

『社會へ出て、活動する時になつたら、私で出来ることなら御援助しませう。』と澁澤さんは云つた。

天下の富豪に面會したが、貧乏書生を救はうとは云つてくれないので、今度は内職に學校教師の口を求めた。湯島に進學館と云ふのがあつて、英語の教師の口であつた。生徒が

三人、月謝が三十錢、全部自分が貰つても、九十錢だつた。一文も入らぬよりましだと云ふので行つて教へてゐた。

それを、同郷の後輩の學生が聞傳へて追々とやつて來た。遂には四十人近くになつた。その變り、ABCからやるものもあれば、マツコーレイなど持ち込むのもあると云ふので大變だつた。

朝五時から授業を始めて、お晝前からは、自分が學校へ通ひ、午後三時から又教授、それで夜の十一時まで奮闘した。大變だけれども、米代は稼げると思ふと元氣であつた。

ところが、月末になつて見ると、月給を三圓しかくれない。生徒は十五日以後から來たので半月謝である上に、校長が五分二をとり、秋山には五分三と按分してあると云ふのであつた。

そんなことで、兎に角、豫備門から大學へ入つたが、おかげで、尻から二番だつた。そのうちに、父が大阪で失敗して、一仕事すると東京へ出て來た。

或日、その父と、上野公園を散歩した。父の意氣上らぬのを見て、定輔は、『お父さん、貴方は東京に住んで居らつしやらうと思へば月、いくらあれば好いでせう。』と訊いた。

『そうだね、二十五圓も要るか。』

『その金、私が作りませうか。』

『お前出来るか。』

『作つて見ませう、廣い都會だ。』

定輔は、父が岡山中を駈け廻つて、金二圓を作つて本を買つてくれた時を思ひ出した。池の端で、同志四人が自炊生活をして、自分の分が十圓、それに父の分を加へて、月三十五圓を稼がねばならなくなつた。それは大金である。今日の百圓にも匹敵した。

そこで、矢張り學校教師で、もつと生徒の多いところをと、物色したところ、進學館の生徒に印刷局の學校へ通つてゐると云ふのがあつた。この學校には生徒數が何百人とある

と云ふ話であつた。

『そんな學校があるのか。』

秋山は驚き乍ら、

『その學校の教師になりたいものだ。』と竊かに考へたが、何としても手蔓かない。

すると、同郷の人が大藏省に勤めてゐて、父と知人だつたので、大藏省と印刷局なら因縁があると云ふところから、廻りくどく行つて、それでも、遂に、轉々と紹介狀を貰つてとう／＼その校長に逢つて美事に月給十二圓の教師になつたが直ぐ十五圓になつた。

一方陸軍の一等軍醫、用吉佐久間と云ふ人が英語を習ひたいと人を介して來た。出勤前に一時間習ひたいと云ふので、月六圓の契約が通つた。すると、教へ方が甘いと云ふので先方から八圓の報酬をくれた。合計二十三圓になつたが、間もなく印刷局長の二男が英語を教へてくれといつて、これは三圓貰ふことになり、午後三時から通つて、遂に五圓に上げて貰ひ、時々官舎で汗粉まで御馳走になつて、合計二十八圓の月收を算した。

そこで、後の不足を捻出するために、故郷の岡崎と云ふ人に、手紙で無心して、百圓だけ貸して貰つた。

(九)

大學では制服の規定が出来た。

一番初の夏は、麥藁帽、それは赤いリボンのついたの、夏服はジャケットの木綿服、黒く縁を取つて、鼠と黒とのミシン織。これを神田の洋服屋に注文すると、三圓五十錢。洋服は出来たが、扱て金が拂へない。

『濟まないが、金がないから、他の人に廻はしてくれないか。』と断ると、

『何時でも、好うがす、着てらつしやい。』と云つてくれた。それを一年間かゝつて拂つた。

冬服はなしで、夏服を着て、友達からシャツを幾枚も貰つては、重ねて着込んで、通つ

た。すると、夏服を作つた洋服屋桔梗屋の主人齋藤と云ふのが、

『金なんか心配しないで好い、作つて上げる』と一着冬服を贈つた。その人は後に神田で屈指の資産家になり、後年秋山定輔が、衆議院議員候補に立つと、『今文』の主人と二人が参謀長になつて、秋山を當選させた。

大學へ入る時尻から二番の秋山は、赤門前のパン屋で、パンを買つては走り乍ら食つて掛持教師に走つてゐるが、一年の終りには先頭から二番にせり上つた。

一番が原嘉道、その他同級には、柴田嘉門、石井菊次郎、小山温、中谷廣吉、秋山雅之助、伊集院彦吉など、法科に机を並べ、政治科には、床次竹二郎などがゐた。

遂に苦學力行、學校を出た。

然かも最高の學府を卒業したものは、争つて官途に就いたが、定輔は期するところがあつて、辯護士を志願してゐた。

卒業前から、大阪に行つてゐる父が大病になつたので、母が倉敷から看護に出てゐたの

で、定輔も行った。

その時、母は息の卒業後の抱負を聞いて『それも好いが、一年か二年、遅れるわけでもなからうから、是非官吏になつておくれ。』

『お母さん、無理もないが、それはいけません、役人なんてものは、今の世では、薩摩か長州の奴でないと駄目なんです。』

『それも、そうだらうが、これだけは、妾の遺言だと思つて、一寸でも役人になつておくれ、お願ひだ。』

多年貧民長屋に住んで、ドン底に苦勞を重ねて來た母親が、近所の豆腐屋、人夫、そんな人達に誇りたい息子の身分であつた。

印刷局長、佐藤正美氏とは學校や令息の關係から、卒業證書を握ると、先づ百圓の金を恩借に行き、ついでに就職のことに及んで、會計検査院へ入ることになつた。官吏にならないつもりが、先輩の親切で、仕方なしに、母の願ひも叶へることになつた。月俸は五

十圓、高等官試補であつた。三ヶ月分を一度にくれるので、百五十圓入つた。それに借りた百圓と何かと三百圓近くなつた。

『カンインサンニナリマシタ』と大阪の兩親へ電報した。

東京から、母に、黒縶子の帯を一本と、水色セルの着物を一枚買つて行つた。もつともつと、母のために、あらん限りのものを買つて、持つて行きたかつたが、何を買つて好いか判らない。

『お金を、これだけのお金を見せて、驚かせてやらう。』

そう思つて、金を抱いた。母は果して、大金を見て、ビックリした。

父の病氣も治つてゐた。父は定輔を日本一の偉人になると信じた。自分の若き折の空想が、始めて自分の息子に再現出來た、と思つた。秋山定輔は、秋山儀四郎であると、親も信じ、子も信じた。

『さア、母さん、何處へでも連れて行きますよ、日本中の名所舊蹟。』

母は呆然としてゐた。京都、奈良、高野、須磨、明石、二週間は、夢と過ぎた。秋山定輔が廿三、恰度母が子を生んだ年である。母は四十六歳になつてゐた。三百圓の金がうなつてゐる。

書生と田舎者のお婆さんの客、一流の宿を目當に入つても、大抵は狭い部屋に案内されるのであつた。

『おい／＼、もつと上等の部屋はないか。』

終ひに自分で、帳場まで出掛ける。茶代もうんとフン發する。

『十日間に、この金みんな使つても構はない、お金で濟む快樂を母に飽くほど見せて上げたい。』

母の額の深い四十六年の皺を、金三百圓で伸ばして見たい考へだつた。

だが、母の喜びは最初の一日であつた。母も天上に遊ぶやうだつたか、二日目から、曇つた。

『定輔や、今頃から、そんな贅澤では、お前の末が案じられる。』
母は呟いた。

『何アに母さん、大丈夫です。東京へ歸れば、これからは、いくらでもお金なんか入るんですよ。』

『いゝえ、まだ／＼、これから嫁も取らねばならぬ。家も持たねばならぬ。』

母らしい心遣ひであつた。でも、母の嬉しさはあつた。最後に須磨の海月樓に泊つた。廣々とした海の前に、高樓の座敷、その欄干に立つた母は、夢幻の國に遊ぶやうに、うつりしてゐるたが、見ると、ガツクリ身體が疲れてゐた。

永年の貧苦との戦ひ、しかもそれは終つた。日本一の息子が成人して今、共に在る。

『お母さん、がっかりしては駄目です。しつかりして下さい。私が、故郷を出て十年、今日まで苦勞したのも、みんな、お母さんを樂しませたいためだつたんです。まだ／＼、定輔は、こんなこと位では満足しません、それこそ天下一の人間になるんです。それまでは』

お母さんも、しつかりしてゐてくれなければ駄目ですよ。』

母は、静かにうなづいた。

『そうだとも、妾も、せい／＼身體を大事にせにやならぬ。』

翌日から、母は海岸へ出て散歩したり、牛乳を飲んだりした。

別れて東京へ歸つて、一月経つか経たぬかに、母は死んだ。

希望も、何も、一時に壊滅した。何の生き甲斐があらう。

五十圓の官員さんになつて、ホツと一息すると、母がない。噫、母は、遂に秋山定輔を一個の人間にするための尊い犠牲だつたのか。

涙のうちに郷里で葬式を済ませた。幾度か、空虚になつた魂を抱いて考へた。そして到達したのは、

『母は死んだのではない、顔が見られないだけだ。』

定輔は、母の對照を、國家の上に移さうと考へた。

『それと、母の墓を作ることだ。』

故郷の倉敷は昔から立派な墓を誇るところであつた。それは天領であつたから、大名のある國のやうに、平民の家でも、墓は如何に大きくともとがめるやうなことはなかつたからである。

倉敷の富豪に數へられる大原、大橋、野崎などの家の墓の豪壯さは他に比類を見ない。

考へて見ると、そんな金持とは、いくら將來を思つても、そんな莫大もない金持とは競争にならないかも知れなかつた。

で、何とか甘い工夫はないか、と友人に智恵を借りると、

『じゃ、日本一の偉い人物に、お母さんの墓標を書いて貰へば好いじゃないか。』と、云ふのであつた。確かに名案である。

『じゃ、その、日本一の偉い人と云ふのは、一體誰だらう。』と云ふことになつた。

諸友が集つての席上であつた。

『そりや、勝安房だらう、海舟翁こそは、江戸城三百年の徳川の末路を、誤らずに處理した人だ。』と云ふのに衆口が一致したが、中には反對者も出た。

『いや、勝は過去の人だ、伊藤博文こそ、近世の偉傑だ。』

秋山は心中でどちらも偉いなアと思つた。

『勝なら俺が引受けてやる。俺が、孝女白菊と云ふ律を作つたのを、勝が賞めてくれた。由來知遇を得てるから、俺が頼んでやる。』

と云つたのは櫻井熊太郎であつた。その方は勝伯が早速承諾してくれた。

伊藤博文の方は手蔓がなかつた。やつと手ぐつて見ると、鄭先生の義弟、揚龍太郎が、先生の縁で秋山の副保證人になつて貰つたことがある、その人が、伊藤公の氣に入りの伊東巳代治と従弟の間柄である。揚氏は内閣圖書館に奉職してゐた。

揚氏は快諾したので、その紹介狀を携へて屢々伊藤巳代治を訪問したが、何時も、

『今日はいけない、明日。』と玄關子が斷つた。とう／＼十三回目まで根氣よく、通ひつめて『上れ。』と云ふことになつた。

『度々通はせたが、用は何か。』

伊東伯は訊いた。

豫ての念願を語ると、伯は異様な顔をした。

『判つた。然し伊藤さんに書いて貰はんでも、君が自分で書いてはどうだ。君が伊藤より偉くなれば好いじゃないか。』

『それは御尤もですが、私自身は、生きた母の墓であります。この墓は、これから、大きくなつたり、又小さくなる時もあります。で墓標の方は矢張り現在、日本で一番偉いと思ふ方に書いて戴きたいのです。』

『成程、宜しい、それでは伊藤さんには話して置かう。時に、君は今何をしてゐる。』と快諾して、現在のことも訊いた。

『會計検査院に居ります。』

『さうか、あすこにはロクな人間が居らん、それだけ出世が早い、しつかりやり給へ。』

親切に、伊東伯は官界の榮達法なども説いて聞かせた。

氣持よく歸りはしたが、十何遍か通はされたことが、胸に納らなかつた。會はなければ會ふまで通つてやれと思つたゞけで、もう伊東伯によつて、どうして貰はうと云ふ氣は夙くに消滅してゐた。

『一年でも、二年でも好い官員さんになつておくれ。』と云つた母の言葉を、偶然一年半守つて、官途を辭めた。二十四歳の秋であつた。

藩閥の壟斷する官界に、學生時代からあきたらぬものがあつた。

その官僚萬能に敢然と戦ひの矢を番ふものは、新聞であつた。その代り世間は、そんな新聞を惡魔外道と思はせられてゐた。歴代政府の御用機關である福地源一郎の東京日日新

聞のみが通用してゐた。

その外道の新聞。それを一青年が興さうと決心した時には、誰も對手にしなかつた。秋山定輔はその時二十五歳、烈々たる氣に燃えてゐた。

氣で、新聞は作ると決心したが、金が一文もない。素手だ。先づ其頃でも、大新聞を作る以上十萬圓の金は要る。

富豪を説き、天下國家を論じたが、誰一人耳を傾けるものはなかつた。そのなかで、只一人その狂氣染みた、青年秋山定輔の意氣を買ふ人があつた。

それは印刷局以來の知己佐藤精一郎であつた。然し佐藤その人には金はない。がその姉さんは岐阜縣の名士と謳はれた安藤就寬に嫁いでゐた。安藤就寬は、陸奥宗光の友人で、維新の志士であり、名家であつた。その安藤氏は既に歿し、佐藤の姉さんは未亡人となつてゐた。そこには可なりの遺産があつたから、その姉から資金を仰いでやると云ふことになつた。

『全部は出来ない。機械とか社屋を作り給へ、流通資金を出させやう。』と云ふのであつた。

そこで、秋山定輔は、先づ先決問題の家探しに歩いた。

或日、そぼ降る雨のなかを、尻端折に傘をさして、歩き廻つた揚句、神田の須田町から鍛冶町の方の大通りへ行くと、當時有名な旭屋と云ふ洋品店が閉つてゐた。三階で、石造り、日本最初の石造洋館建だつた。旭屋と云へば、繪草紙にも出た、東京名所の一つで、お上りさんが一應は見物に來るところであつた。

とにかく中へ入つて番人らしい爺に、様子を聞くと、荒木作市と云ふ人に債權があつて旭屋は破産したとのこと。

『いつを、新聞社にすれば、素晴らしいぞ。』

青年の夢が、いよく飛躍した。

荒木と云ふのを探して主人に逢つた。早速借入を交渉したが勿論初めから信用しない。

例の根の一手だ。

毎日のやうに押かけて行つては、懇願した。對手の主人は老人だつたが、先づ家内の人が、熱に動かされ、老人も、青年の天下國家論に耳を傾けるやうになつた。だが、扱て家を賣るか、賣らないかと云ふことになる、又難關であつた。

でも、家内の同情を集めて、その家の婆さんがしきりと應援してくれたので、主人の荒木老人も遂に、承知せざるを得なくなつた。

ところが、扱て、その値段になると、その價格の安いことが、秋山を驚かせた。先づ一萬圓——と思つてゐたのが、

『さうさね、二千七百圓位でよからう。』

と云ふのであつた。でも、それまで漕ぎつけるのに、約半年かゝつた。

先づ三百圓を手金にして、漸く賣買契約が出来て、東京名所の旭屋の石造三階建が、白面の青年、秋山定輔の名儀になつた。

『さア次は機械だ。』

三十二頁刷の印刷機を二臺、十六頁を三臺、それに活字、家具、一切合財で、二萬圓、それは、學生時代に手紙で無心をしたことのある、故郷の岡崎と云ふ富豪、それは父の縁故、そこから千圓、阪本金彌からも借りた。阪本は云はゞ、秋山とは同志で、郷里で中國民報を既に經營し、旁ら鑛山事業もやつてゐた。

形は出来上つた。

編輯局の陣容は、大石正巳、稻垣滿次郎が編輯顧問、江木衷、柴四郎、土子金四郎、大島定益、鈴木天眼、秋山定輔、それ等が編輯同人と云ふわけ、この名を揃へて、都下の主な新聞に、全紙一面の創刊廣告を出した。全面一頁廣告の魁である。

天下に廣告をして、視聽を集めたが、それだけで、一文も金がなかつた。當てにした佐藤精一郎の金策がはかどらない。廣告代は矢の催促、開業式に誂へたお祝ひの時計の代金

も拂へな。こ。

家屋と機械を抵當に入れて、高利貸から借りて、どうやら發行の運びとなつた。

『二六新報』とつけた。それは偶然にも、秋山定輔が二十六歳で始めたからのやうに後世人が云つたが、實は『二六時中』と云ふ意味であつた。

一青年秋山定輔の、眞の活社會へのスタートは恚うして切られたのであつた。

二六新報の名は忽ちに當時の社會に大きな波紋を投じた。

二六新報の使命は、弱者の味方たり、強者の敵であることを眞向からふりかざすことであつた。社會惡に敢然たる筆陣を張つた。

その後、二六新報は、一年半で一旦倒れたが、それより後の秋山定輔は、漸次に政界に地歩を占め、伊藤公にも、伊東伯の口添へに依らず、實際政治の舞臺に乘出して、却つてこれを支援し、遂に伊藤公の或時は股肱でもあつた。公の歿後、桂公と提携して同志會を組織し、隱然政界の環鍵を握つて、名聲一世を壓し、或時は政界の爆彈と目され、明治大

正の政界の大事件で、秋山定輔の關門を潜らざるはないと云はれた。

それは政黨史を繙く者の夙に知るところである。

その後年も、又一個の大なる人間苦闘史であるが、茲には、それを割愛する。

武藤元帥

(一)

南國らしい豊かな陽を受けて、有明灣の海面が光つてゐた。その海に面して、寒村だけれど、昔からの小さな港がある。百貫港と云はれた。それは現在の佐賀縣杵島郡龍王村のことである。

東西南北の、東だけが廣闊に開けた沃野で、平野の盡きるところが有明灣に接して、北は、八幡嶽、瀬戸木場嶽が區切つて、東へ走つて、徳連山、鬼ヶ鼻山に聯り、西には大川内嶽、黒髪山、神六山が聳え、南に株島山が背をなしてゐる。斯うした連山に包まれたなかの沃野を六角川が貫いて、有明灣に注いだ。その川の灌漑の便を受けて、一帯の平野は肥前第一の豊穰の地として、古來から農産に恵まれてゐた。

六角川の舟行の便と、古來からの百貫港の海運を利して、龍王村には船乗が多かつた。沃野にみのつた米や棉を積んで、長崎や薩摩へ出た。

だから、龍王村には古來から、代々船乗を渡世とする家が多かつた。

その昔、龍王村には、景行天皇が、九州御巡幸の途、御船を繋がせられたと云ふ古い話もある位だから、その村の船乗稼業は遠く古代からの世襲であつた。

武藤喜衛門の家は代々船乗を業としてゐた。その家の二男に生れた、最初の満洲國駐在全權大使、關東軍司令官陸軍大將で、更に元帥となつた武藤信義將軍も、その父喜衛門が元帥の幼い時に死ななければ、或は海軍の將となつてゐたかも知れない。

舊幕時代から殊の外海防のことには意を注いだ鍋島藩からは、案外に海軍にその人を出ださずして、却つて陸軍の將を出した。海軍では、森山圭三郎中將あるのみである。

武藤元帥が八歳になつた時に、船乗りであつた父喜衛門は病死した。

幾つかの持ち舟もあつた武藤の家は、幼い子供と妻を残して去つたので、元帥の兄も、父の家業を継ぐには早や過ぎて、元帥の兄弟は、母と祖母の女手ばかりで育つより外はなかつた。

自然持ち舟は人手に渡して、さゝやかに、母は二人の子供の成人を待つより外はなかつたのである。それは恰度明治八年、佐賀の亂が起つた翌年であつた。縣の首都、佐賀では何となくまだ物情が騒然としてゐた。

けれども、縣を擧げて、舊藩の子弟の教育は旺んであつた。

遠く天明年間に、時の藩公治茂公は、佐賀に弘道館を設けて、時の有名な學者、古賀精里、石井鶴山等を迎へて、子弟の教育に専らであつたが、それは廢藩となつた後も明治四年までは續いて、江藤新平、大木喬任、副島種臣、佐野常民、大隈重信などの諸名士も、皆弘道館の最後を飾つた出身者であつた。

維新までは、藩士の子弟は、十五歳になると必ず、その藩校に通はねば、祿にも有付けぬほどであつたが、さうした奨學の結果は、農工商の子弟にも影響を及ぼして、維新後には、縣下の各地にもそれ／＼學校があつて、龍王村には、郁文校と云ふのがあつた。

向學の風を受けて、武藤元帥も、八歳になると、父の死に發奮して向學の志しを立て

た。父が生きてゐる頃は、遠く船出して行く父を海岸に見送つたり、兄と共に櫓櫂を肩に運んだりした鼻垂れ小僧が、急に大人らしい口を聞くやうになつて、母を驚かせもし、喜ばせもした。

『お母さん、家は船乗りだけど、これからは學問さへすれば、大臣にでも參議にでもなれるのです。大隈參議のやうに、あの人は足輕だけれど、あんな偉い人になられた。これからは、町人でも百姓でも勉強次第ですバイ。』

行燈の傍で、板土間に座つて、棉を繰る母の手傳ひをし乍ら、信義少年突然に恚う云ひ出したのであつた。

『そんなに偉い人にならんでも好いが、お前が、そんなに勉強したいと云ふなら、學問をしなさい。もう舟も賣つて了つたし、お母さんはお前達が、お父さんのやうに、船に乗つて遠くへ、海の上に行くのは心配でもあるのだから。』

母は頼母し相に、棉を繰る手を休めて、利漉らしい息子の顔をしげ／＼と見入つた。

『ほんとうに、學校へ入れて呉れますか。』

『好かともく。』

信義少年は雀踊りして喜んだ。

村の郁文校は、佐賀の舊藩士達の、江戸に志を得なかつた人達が教鞭をとつてゐたので、自然に舊藩時代の氣風が、校風を作つてゐた。それは弘道館と同じやうな教育だつた。

寒中でも、足袋は無論穿かないどころか、生徒達は野道を家から年中跣足で通つた。校服は、刺子の柔道着が一枚、それに破れた袴を穿いた。

四書、五經の外に、不文の教へがあつた。

それは鍋島藩では古來有名な、『葉がくれ』の教へであつた。『葉がくれ』とは、遠く寛永の頃、徳川三代將軍の時代に、鍋島藩の家中に生れた秘書の傳へる不文の經典のやうなものであつた。

代々藩中に傳はつて、後世は、これを佐賀論語、肥前論語とも云つた。

御家來としては、國學心掛くべきことなり。今時國學落目に相成候——。

『葉がくれ』の寫本の冒頭の文に恚う書かれてあつた。

——武士道と云ふことは、即ち死ぬること、見付けたり。凡そ、二つ一つの場合に、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし、胸すわりて進むなり。若し目にあらぬとき、犬死など、云ふは、上方風の打上りたる武士たるべし——。

犬死、氣違ひと呼ばれるれども、腰抜にくらぶれば、恥辱には非ず——。

方言まぢりに説かれた『葉がくれ』のなかには、各章、各節悉く、激越な、武士の恥と、死を輕んずること、敵に勝つ——ことのみが説かれてあつた。

これを祖述した人は、鍋島藩で、元二百石を取つた隠士、石田一鼎であつた。

徳川三代に互つて、天下は漸く泰平の夢に酔ひ、文弱の風が流れ初めた頃で、大阪の役には、一旦は徳川に敵となつた鍋島藩も、時代の風潮を享けて、上下にゆるみが見えた。それを憂ふる隠士が、言々骨を刺す佐賀つほの意氣を武士道に移した祖述であつた。

石田一鼎は、時の藩公、泰盛の近侍だつたがその薨する時、世子の顧問となつたが、後に一世子の勘氣に觸れて、片田舎にながされ、その後、許されて、佐賀郡梅野山下田に引籠つて、塾を開いたのであつた。そこで下田處士と號してゐた。藩の子弟達はその名を慕つて門に集まつた。下田處士は食ふや食はずで武士道を説いた。その高弟の山本常朝と云ふのがその祖述を受けて、師なき跡を、又師の行跡を學んで、北山に草庵を結んで、それを説いて藩の子弟を教育した。そこに十九歳から三十九歳まで二十年間、通ひ續けて、遂にそれを全十一卷に筆寫したのが、藩の祐筆田代陳基であつた。

無形の『葉がくれ』が形を作つたのは、その頃、元祿年間のことであつた。

——此始終十一卷は、近々に火中すべし、世上の批判、諸士の邪正、推量、風俗にて、只自分の後學に覺え被居候を、咄のまゝ書きしるし、他見の末には、意恨、惡事ともなべく候——とその原本には斷り言があつたほどで、飽くまでもそれは天下の祕書として傳へられたものだが、斷り書のやうに火には投ぜられずに、却つて、潜り潜つて、遂には

藩全體に傳へられて、公然の祕書となり、後世には聖典のやうになつて、『葉がくれ』を知らぬものは佐賀人でないやうにさへなつた。そして、それは、佐賀つほの魂を作り上げて、昭和の今日では、あの廟行鎮の爆彈三勇士をさへ生むやうになつた。三勇士の一人江下武二は、佐賀縣神崎郡蓮池村百賀の生れだが、武藤元帥の郷里に近い、杵島炭坑が、その生ひ立ちの場所で、『葉がくれ』の精神が炭坑夫の息子である江下にも何時の間にか染み込んでゐたのであつた。

(II)

後年、武藤大將がまだ陸軍少佐の頃であつた。日露の役が終つて、黒木第二軍の參謀として凱旋するその前に陸大を出ると露西亞の駐在武官となり、ハルピンの特務機關長となつて、風雲を孕んだ云はど敵國とも云ふべきなかに諜報の役目を勤めることゝなつた。武藤少佐は、或時、ハルピンから、今の東支鐵道沿線を窺かに視察することを志して、

鐵路を一人の從卒を連れて、徒歩で線路を踏査した。行けどもく雪の道だつた。數日を少佐は黙々と歩いた。數日を夜に日をついで歩いた。けれども一向に無駄口を利かない。そして具さに、沿線の状況を頭に曇み込んだのであつたが、遂には行き暮れて、宿る民家も見えぬ時であつた。

さうした強行軍も、少年時代の『葉がくれ』の修養の賜であつた。進むことより以外に何者もない教へが染み込んでゐたからである。

最初の關東軍司令官として、滿洲國全權大使として、赴任するに當つて、日比谷公園で開かれた國民送別會では、マイクロホンの前に立つて、元帥が述べた言葉は、僅かに數語であつた。

『皆さん、行つて参ります。御氣嫌やう。』

凛とした若々しい聲が、たゞそれだけ、寡黙の將軍と云はれる武藤元帥のそれが挨拶であつた。これを送る諸代表の幾多の送別の辭よりも最も、強く、元氣に、大衆の肺腑をつ

いた言葉であつた。

『夫は、滿洲に骨を埋める覺悟で参りました。』

東京下落合に留守を預るのぶ子夫人の言葉の通り、武藤元帥は、まつ直ぐに、文句を云はずに進んで行つたのであつた。

田中内閣の時であつた。世界の視聽を集めた有名な東方會議が開かれた。

故田中大將を中心に、支那問題に深い關心を持つ人々が、對支策について、交々起つて多年のうん蓄を傾倒して、長々と意見を述べた。或る將軍は卓を叩いた。まなぢりや上げて、叱咤する人もあつた。そのなかで、終始、無言で聞いてゐたのが當時も關東軍司令官の任にあつた、中將武藤信義であつた。

『武藤閣下、あなたの御意見は……』

石のやうに黙りこくつてゐる有様に、少々業腹で、詰め寄るやうに云つた人があつた。無言の將軍は、劍をガチャツと鳴らして、卓の前にヌツと立つた。

『やらうと思ふことは、やれば出来ます。』

百出の議論を一言で答へて、再び椅子に座して、ニコツともしなかつた。

それが『葉がくれ』の精神であつた。

刀を折られたにせよ、手にて仕合ひ、手を切り落されても、肩にてはふり倒し、肩切り離されても、口にて相手の首の十や二十は喰ひ切るべし——。

『葉がくれ』の一節には恁んな凄惨な文句がある。どこまでもやり通すのである、不屈の魂である。武藤元帥は、日清、日露、シベリヤ出兵にも實戦に参加したが、それは常に帷幄のうちにあつたからだだが、若しも戦ひの先登に立つてゐたら、そのまゝをやつたらうと思はれる。

(三)

佐賀の方言では、腰抜けのことを、スクタレー——と云ふ。

或る時徳久某と云ふ侍が、同輩を招いて御馳走した。その時に出したのが鱧膾だつた。それをある男が、

『徳久は、鱧膾を喰はせた。』と云ひふらした。それがとうとう徳久の綽名のやうになつた。

徳久はそれを知つて、殿中で、一刀のもとに斬殺して了つた。

殿中で刃を抜くことは、將軍の殿中でなくとも、大名の殿中でも同じことであつた。

鍋島藩の重臣が集つて、罰を相談した。

『殿中で、刃傷をした罪は軽く御座らぬ。』

大目付役がいきり立つた。すると藩公が、キツバリと云ひ放つた。

『男が、人に鬻られて、ヌラリするは悪るか、そりやスクタレー——バイ。殿中でも、斬つて好かこつ〜。』

徳久某はそれで無罪となつた。藩公からしてこの意氣だつた。

又或時、伯父に『スクタレー奴！』と叱られた青年があつた。

友達に介錯を頼んで、腹を切つた。

「俺が、宜し！ と聲をかけるまでは、首を落すな！」

そう云つて、グサ！ と突きさしたが、刀を突立て、置いて、硯と筆を持たせて、サラサラと認めた。

「腰抜けと、云ふた叔父め、糞喰へ、死んだらあとで、思ひ知るべし。」

五・一五事件の責を引いて、教育總監を辭した武藤元帥の昨年の決心は固かつた。荒木陸相を始め、人々がそれを引留めたが、

「たとへどんな事情があつても、俺は辭める。」

と云つて承知しないで、引込んで了つた。これが、時代が違つてゐなかつたら、將軍は黙つて、下落合の邸へ歸つて、切腹してゐたかも知れない。

(四)

八歳で郷里の郁文校に入つた武藤少年は、その頃から無言だつた。學校でも、餘り口數をさかなかつた。家へ歸ると、母の棉線りの手傳ひをするか、讀書に耽るかで、村の腕白小僧達と遊んで暮すやうなことはなかつた。

暇があると、伯父の家へ出かけて行つて、米搗きを手傳たり、稻こきをしたりして黙々と働いてゐた。それが少年時代の娛しみの一つであつた。

十三歳の春を迎へると、學校は首席で卒業した。學校では、その才を惜んで、そのまゝ學校に留めて、代用教員として、母校にその日から教鞭をとることをすゝめられたのであつた。その頃長兄は未病死してなかつたので、母のもとから通つて、それを勤めた。一方では、もう餘り豊かでない家のために、幾分でも、僅かな月給を貰つて、家の足しにする

と云ふ健氣な心もあつた。それから三年間、十六の時まで母校の教壇に立つたが、そのうちに進んで學校へ入りたくなつたが、學資が充分でないから、師範學校を選ぶことゝなつて、當時佐賀に出來た師

範學校へ入學した。

恰度その頃、佐賀出身の先輩である副島種臣などが主唱となつて陸軍の軍人を志した生徒達が集つて、更に郷黨を養ふために、軍人養成の目的で別の學校を起した。在京の者は富士見町に『干城學校』を建てた。將來國家の干城を作ると云ふので、その名稱をつけたのであつた。

郷里の佐賀にも、同じ名の學校が同時に出來たが、それには主に舊藩士の子弟ばかりが集つて、船乗りの息子である武藤大將は、入學する方法がなかつた。

後に士官學校に入つて、同期となつた、豫備陸軍中將の大島又彦、大野豊四將軍などはいづれも、干城學校の方に入つて居たのであつた。

怱うして陸軍の士官を作ること、佐賀の先輩達は熱心であつたので、武藤大將も、師範學校に通つてゐるが、眞に佐賀人らしい氣概を見せてゐる干城學校の生徒達が羨ましかつた。

休暇で家に歸ると、武藤青年は、母の前に決心を語つた。

『お母さん、私は軍人になりたくなりました。折角、怱うして師範學校に入りましたが、學校の先生となつて一生を送るよりも、私は軍人となつて、侍の家でない家を起して見たいと思ひます。』

『それは好いが、お前、干城學校へは船乗りの家では入れないだらう。』
母は淋し氣に慰めるのであつた。

『干城學校へ入らうとは思ひません、幸ひに軍人になる方法が、もう一つあります。それは近頃出來た、陸軍の教導團と云ふのがあります。それは、一兵卒から、鐵砲を擔いで、上つて行くのですけれども、勉強次第では、士官にもなれるのです。』

『それは何處に出來たのだえ。』
『東京です。』
『東京!』

母は恚う聞き返して暫く黙り込んだ。武藤青年も、さう云つたものゝ、たつた一人となつた母を残して、遠く東京へ行くことを思ふと氣の毒で、それ以上言葉が出なかつた。

「信義、構ふことはない、この母は、案じるに及ばない。それでは行きなさい。たつた一人になつたお前を、遠くへやるのは心掛りだが、お父さんだつて、何時も遠くへ、海の上を幾日もく行かれたのです。私はお前が、立派な軍人になるのを楽しみに待つてゐませう。」

「ほんとうですか、お母さん。」

母は靜かに佛間の方へ立つて行くと、臆て一包の金をその前に置いた。

「東京へ行くとなると、路銀も入用のことであらう、こゝに僅かだけれど、これは、外でもない、お前が都文校の先生をしてゐる時に持つて歸つたお給金を、お母さんは、一文も手をつけずに、今日のやうな時に入用だと思つて、佛様に供へて置きました。サア、これをその學費の足しにするが好い。」

武藤青年の眼に、生れて始めて、涙の露が眸に熱かつた。

(五)

東京では、干城學校の生徒達は、意氣軒昂であつた。そして生徒のなかには、既に幼年學校へ在學してゐるものもあつた。

校風は、舊藩の様子と少しも變らなかつた。そして郷里の氣風や言葉をまる出しで、佐賀辯をそのまゝに、東京へ移したやうな生活であつた。

「葉がくれ」魂をパチ／＼させてゐた。

當時、薩摩の健兒達を集めたのが、番町にあつた二松學舎であつたが、熊本の有斐學舎の跡に干城學校があつた。

雙方共に九州男子と云ふので、維新後の東京では鼻息が荒く、東京の書生は、維新の鴻業に参加した、薩長土の書生達が肩で風を切つてゐた。

或時、その二松學舎の生徒と、干城學校の生徒とが、往來で、些細なことから喧嘩となつた。

どちらも、九州つ兒だから、氣が荒い。そして團結の力も強いから、それは忽ちに、生徒同志の大きな争ひにまで波紋が延びて行つたのであつた。

「スクタレてはいかんぞ。」

「葉がくれ」魂が相集つて、忽ちに火を吐いた。

「このまゝに置いては、葉がくれ武士の名折れだぞ、國の名譽にかゝわる。」

干城學校の騒ぎは大きくなつた。全校が沸き立つた。

夜が來ると、一層議論が沸騰して來た。そのうちに、一人が叫んだ。

「構はん、今晚のうちに、夜襲をやれ。」

「うん、夜襲か。」

「好か〜。」

一議に及ぼす衆議は一決して了つた。棍棒などを用意して、夜が更けると、生徒達は、窃つと寄宿舎を三々伍々脱け出して、九段の坂の上を集つた。

もと／＼軍人の教育を受けてゐるし、中には、もう正式に軍人らしい訓練を経てゐるので、忽ちに、一小隊ほどの軍勢が整つた。そこで萬事、兵式に隊伍を組んで、夜の暗を番町の方へ、しと／＼と進んだ。

二松學舎の方では、そんなことゝは知らぬから、もう一同が深い眠りに落ちてゐた。

敵の寄宿舎の塀の外まで音を忍ばせて、近寄ると、佐賀方は、指揮者の號令一下、

「ワツ！」と喊聲をあげて、まるで義士の討入りのやうな様子で、塀を飛び越えてかけのぼる者、裏門を打ち破つて、大高源吾を氣取る勇士など、まつしぐらに、眠り込んでゐる寄宿舎のなかへ闖入して、手當り次第に暴れ廻つた。

「來るかも知れぬ」とは薄々豫想はしてゐたものゝ、その夜に襲つて來るとは思はなかつたので、二松學舎の方では不意を打たれて驚いた。寢衣のまゝ飛び出して、流石に氣の荒

い薩摩の青年だけに、直に應戦して、到るところで格闘が演じられた。

何と云つても、まだ學生の身分だったので、鐵砲や刀を持ち出すわけには行かなかつたので、干城組は、暴れるだけ暴れると、

『引け』と云ふ指揮者の命令で、素早く、夜が明けぬうちに、凱歌を奏して引揚げて了つた。

何分不意だつたので、二松學舎の方では、窓は破られ、障子は毀れ、棍棒で、頭を打たれたり、腕に傷を受けた等、輕傷者の數は餘程多かつたが、そのなかに一人は瀕死の重傷を負つた。干城組の方にも負傷者はあつたが、攻めた方だから、左程のことはなかつた。

その頃は、學校同志で、その位の騒ぎは、屢々あつたことで、雙方の學校當局も、別に驚きもしなかつたが、二松學舎の重傷者の容體が危くなつて來たので、問題が大きくなつた。

然も、その重傷者と云ふのは、當時薩摩の海軍で飛ぶ鳥をも落とす、樺山大將の甥に當る青年であつた。

『おい、樺山どんが、怒つて、海軍の兵士を連れて、干城校へ乗り込んで來るぞ。』

『何アに、薩摩の樺山が何だ、俺の方には大牟田中將があるぞ。』

當の生徒達は、一向に平氣なもので、仕返しに來れば、何時でも應戦するぞと云ふ氣勢で、毎日毎夜、腕を扼して警戒してゐた。二松學舎の方でも、機あらば復讐をねらつてゐたので、兩校の間の不穩の氣勢は仲々に去らなかつた。そこで終には、警視廳から巡查が毎晩繰り出して萬一に備へると云ふやうなことになつた。

二松學舎方の樺山大將の甥の容體はいよゝゝ悪いと云ふことになつたので、鹿兒島方の先輩達が乗り出して、佐賀の先輩達のところへいよゝゝかけ合ひが始つた。

子供の喧嘩に親が出るのとへ通りで、一學舎の生徒同志の喧嘩から、とうゝ鹿兒島と佐賀のかけ合ひとなつた。

當時在京の佐賀の先輩としては、司法卿に大木喬任が居た。

校の責任者副島種臣は、同郷の子弟の父兄達を集めて事件の顛末を語り、父兄に事を告

げて戒めるやうに注意したが、樺山の甥が死にさうだと云ふので善後策を、司法卿の大木喬任のところへ持ち込んだ。

一切の事情を聞いた大木喬任は、一世の司法大臣だけれども、如何に郷黨の子弟の、青年客氣とは云へ、それには當惑した。流石に剛腹な大木司法卿も尠からず困惑の様子だったが、更に父兄を集めて、注意を促して、再び衝突をさせぬやうに鎮撫するより外はなかつた。

『葉がくれ』の傳統を誇つてゐるとは云へ、明治の聖代になつて、そんな私闘は許されない。佐賀つほの魂は忘れてはならぬが、罪は飽くまで罪である。大木司法卿はさう云つて父兄達に將來の監督を促して、その最後の判決がふるつてゐた。

『若しも樺山の甥が死んだら、主謀者は、致方がない、切腹だ。その覺悟を決めて貰はにやならぬ。』

司法大臣が裁いて、それを法律に問はないで、それに切腹しろと云ふのは、今から思へ

ば随分亂暴な司法大臣だが、まだ封建時代の武士的な氣風から完全に、脱し切れなかつたのである。

主謀者の青年はそれを聞いて、もとより覺悟をしてゐたが、幸ひに對手は生命を取り止めたので、自然に騒ぎは納まり、二松學舎の方でも、屢々復讐を窃かに計畫してゐたが、矢張先輩達の監視が嚴重で、とうとう兩校の反目は時と共に流れて了つた。

武藤元帥は、恰度、その騒ぎのある頃に上京して、鴻ノ臺へ移つたばかりの教導團に入隊してゐたが、そんな郷黨の騒ぎを耳にはしてゐたが、兵營生活をしてゐたから、その仲間には加はらなかつた。

相變らず無口で、毎日訓練を受けて、師範學校の生徒から、一兵卒の修業を續けて餘念がなかつた。年はその時十八歳であつた。

そして教導團では、軍曹にまで進んだ。當時の教導團には、後に陸軍部内で、樞要な地位を占めた人は尠くないが、後年武藤大將が、教育總監から當然、參謀總長の後釜になる

と信じられた、前任者鈴木大將も、同じ教導團の出身であつた。けれども鈴木大將は後任には自分の乾分の、金谷範三大將を推して、部内で多少の批難を受けたことがあつた。そんな事で武藤大將はとうとう陸軍の參謀總長には、ならなかつたが、時が自然に恵んで来て、一足飛びに元帥にまでなつた。そして一旦は追越した金谷大將はもう退役となつて了つた。

教導團は元來が、下士を養成するのが目的であつたが、鈴木大將にしても武藤元帥にしても、そのまゝで終つたら、一模範下士として過ぎたかも知れなかつたが、二人共、勉強して更に士官學校に進んだのであつた。鈴木大將は慶應元年生れで、士官へは武藤元帥よりは三期先輩で、士官學校は第一期の卒業であつた。金谷範三大將は武藤元帥より更に二期後ちの第五期の卒業であつた。

士官學校に進んだ武藤元帥は矢張無口な勉強家で、他の偉人のやうに別に逸話もなく、眞面目な生徒として寧ろ平凡に過して來た。

日曜日が來ると、郷黨の青年達が休息に行くために、番町の附近に寺の一室が借りてあつて、大將も士官學校時代にはそこへ行つたが、別に奇行もなく、佐賀つほの荒い氣質の連中のなかで、極めて濃厚な青年として、黙々と交つてゐるに過ぎなかつた。

六十五になつた當時でも、豊頬の、血色の好い將軍振りを見せてゐるが、その頃は仲々際立つて美しい好箇の青年士官だつた。

羽振りの好かつた軍人全盛時代に、然かも成績が良くて、男振りの好かつた武藤元帥が何故か妻帯するのは遅かつた。夫人を貰つたのは、大學を出てすつと後ちで、三十を遙かに通り越してからであつた。

けれども、その方面では謹嚴なことは、同期の誰もが認めてゐた。餘り妻帯が遅いので後ちにはいろんな噂さが立つて、或時は、大學時代に下宿してゐた下宿屋の娘が、失戀して自殺をしたことがあつた。その對手が武藤元帥であつたが、武藤大將は見向きもしなかつたと云ふやうなことが、當時の新聞記事などになつたこともあるが、それは全く根なし

の話だつたと、同期の大島中將が筆者に語つた。士官學校は首席で、恩賜の軍刀を賜り、近衛の士官になると、少尉で日清戦争が始つた。それに従軍して、凱旋すると、士官學校の教官になつた。寡黙の將軍も、士官學校の區隊長を勤めると、なか／＼寡黙ではなく、細かいところにも口を出して、熱心に生徒の教導に努めた。將軍の一生を通じての無口は、必要なときには必ずしもさうでないこと云ふことが判つた。後ちに陸軍大學に進んで、大尉になつた頃から、郷黨の先輩、宇都宮大將の眼識にかなつた。宇都宮大將は、佐賀の武人の典型で、明治三十四五年頃までは、九州男子の武人の中で、最も人望があつて、誰云ふとなく、これに集る九州の面々を、左肩黨と云つた。左の肩をうんと持ち上げて、寒中にも、薄いシャツ一枚を着た切りで、その仲間に入るには、仲々六つかしい儀式があつた。

それは、單に佐賀の出身者ばかりでなく、薩摩の連中や熊本出身者も、その左肩黨の仲間に入つてゐた。

故明石元二郎や秋山好古將軍などの九州以外の將軍達も、さうした一種の秘密團體に加つてゐるが、武藤元帥もそれに加つた。

『武藤、左肩黨に入るなら、宣誓をしなければならんぞ。』

或時、左肩黨の豪傑達が居並んでゐる前に連れ出された。それは夏のことだつた。一通り、宣誓の文句を読み聞かせられると、『よしこれを呑むんだ、仲間入りの盃だ。』

眼の前に出されたガラスのコップにはなみ／＼と酒があつた。

『何だ、酒か。』とわけもなく、グツと一呑みにやらうとすると、黄金の水のなかに、赤い魚が、ピク／＼動いてゐる。よく／＼見ると、それは、煮ても焼いても喰へないと云ふ金魚であつた。

流石にこれには驚いたが、武藤元帥は、素知らぬ體で、コップを受取ると、無言で、コクリとその酒を乾した。酒が喉元を流れて入ると共に、酒のなかで、半死の状態にあつた金魚が、生臭く、プンと匂つて、喉のあたりで、ヌル／＼と動いたが、無理に、グツと唾

を呑み込むやうに喉から腹のなかへ押し落して、平然とコップを置いて、一禮した。竝居る面々が、

『豪い！』と賞めた。これで左肩黨の仲間に加へられた。明石、秋山の將軍等も、入黨の時には、茶椀酒のなかに、黒い蠅の死骸數匹を浮ばせたのを呑まされたと云ふことであつた。慚うした亂暴な仲間に加つてゐたけれども、元帥には少しも粗暴な振舞ひはなかつた。また新滿洲國に全權として、新京に單身赴任しても、謹嚴な生活は少しも變らない。そして、少さなことは萬事部下任せで、何でも盲判を押してゐるやうで、その實何でも知つてゐて、失敗は自分の一身に負ふが、功は部下に譲ると云ふので、部下の心服は深い。若い關東軍の將校連は、新京の街で、しきりに花街へも出入する。上級の人々が盛んに青樓に登る。或時、幕僚が將軍を無理にそこへ引連たことがあつた。將軍は、その玄關を上る時に、そこに林立してゐる、拍車のついた長靴を一見して、苦笑した。『おい〜、貴公等遊ぶのは好いが、靴だけは仕舞はせて置けよ、若い奴等が眞似をするぞ。』

無口な將軍が珍らしく、青樓の玄關で口をきいた。

服部金太郎

(一)

江戸が、明治の風にすっかり吹き飛ばされて了つたやうに、街のよそほひを一變して見せたのは、銀座通りだつた。

銀座は、何時の時代にも、斯うした時の御先棒を勤めるのである。

散切頭を叩いて見れば

文明開化の音がする

明治五年の晩秋の夜だつた。今の京橋際の元讀賣新聞社のあつたところに出來た、洋服裁縫店伊勢勝の小僧が、そろ／＼前觸れに來たやうな空つ風の運んで來る、大通りの砂ほこりが硝子のケースに吹き溜まつたのに、はたきをかけ乍ら、聞き覚えの唄をうたつてゐた。

うたひ乍ら、ひよいと氣がつくと、大きな鬚をはねた、洋服の紳士が、正しく開化の

ザンギリ頭で入つて來た。

それに小僧はひどく恐縮して、悪いことでもしたやうに、首をすくめて、極り悪さを、誤魔化すやうに、一段と聲を高めて、

『いらつしやい！』と頓狂な聲を張り上げた。

容は官員様らしく、應揚に、小僧なんかには目もくれずに、つか／＼と土間の奥へ入つて陳列棚の羅紗の前に立つて、手を後ろ手に組んでながめた。

羅紗と云ふものが、ふんだんに陳列されてあると云ふだけで、伊勢勝には、ザンギリ以外の客が、ぞろ／＼と物珍らし氣に、覗きに來たりして、朝から晩まで立て込んでゐた。

そこには、ローマンと云ふ、赤鬚の異人が店にゐるのも名物の一つだつた。

洋服らしい洋服を仕立てる店は、東京では伊勢勝が日本人の洋服屋の元祖だつた。

それまでの日本人の洋服は、全く滑稽極るものだつた。珍とも妙とも、實際抱腹ものだつた。そして頭にはプロシヤの帽子を冠つてゐるかと思ふと、足にはフランスの靴をはい

て、上着は英國士官のものかと思ふと、股引は米國陸軍將校の禮装と云つたやうなものであつた。

銀座の開化も恰度それと同じだつた。明治三年、丸の内、土佐山内の邸附近から出た火が丸の内から銀座一帯を焼いたあとは、大震災後の市街のやうに防火建築でなければ許されなかつたので、銀座一帯は、所謂「煉瓦」が竝べられんとしてゐた。そして英國人のお雇技師ウォレスと云ふのが、設計して大通りの町並を建てゝゐるたが、道路の舗装などは一向に顧みられてゐなかつたので、通りは、昔乍らの江戸の道だつた。

だから餘計にほこりつほかつたが、その砂塵を浴びて、伊勢勝の見世先に、服部親子が古道具の露店を開いてゐた。

客の一番に立て込みさかる場所を選んだ古道具屋は、茶道具や、刀架、浪人者が廢刀令と共に不用になつた錆刀を賣つたのなどを竝べた外には、ゴタ／＼といろんなものを擴げてゐるたが、開化を呼吸しに來る通行の人は、一向に、そんな道具展には目もくれなかつた。

けれども、洋服裁縫店の前に、蓆の上に赤い古毛氈を敷いて、チヨコナンと座つてゐる、しなびたやうなチヨコを載せた中年を過ぎた古道具屋の親爺と、その子供らしい、前髪のある小さなたぶさの子供の姿は、伊勢勝の華やかな店とは面白い取り合はせだつた。子供の方は、裸蠟燭に、黒いガンドウのやうなもので三方を圍んだ灯りで、しきりに書物に読み耽つてゐた。

伊勢勝を出た洋服の官員らしいのが、何氣なく、古道具見世の前に立つた。そして、雑然とした古物のなかに、割に小さな八角時計のあるのに目を留めた。

『おやぢ、その時計は動くのか。』

洋服の官員は横柄に、見下し乍ら、チヨツキのポケットから、大きな銀側の懐中時計を取り出して、得意然と突き出すやうに見せて、

『俺の時計は、八時だが……』

『へえ、如何で御座いますか、異人からお拂ひを買つたばかりで御座んして……』

古道具屋の喜三郎は、その八角時計を取り出して、ハタキをかけて、洋服の足許に差し出した。

洋服男は、パチンと大きな音をたて、懐中時計の蓋を閉めて、

『いくらか。』と訊いた。

『左様、一兩におまけして置きませう。』

『動かか動かんか知れんのに、一兩は高いぞ。』

『失禮乍ら、お客様の持ちの時計は、お安くて、八九兩とお見上げ致しますが、手前共のは掛時計で御座んすから、半分と致しまして五兩はする品で……』

『そりや存じとる。八角はまあ新品で五兩じゃ、もつとまからんか。』

『いや、もうお値段のところは、何分舶來物で御座んすが故。』

『そうか。』

洋服はサツサと歩き去つた。

(II)

『お父さん、時計つてそんなに高いのか。』

息子の金太郎が客の去つたあとで訊いた。

『そうともさ、お前、舶來じゃないか。』

父親の喜三郎は八角時計を撫で乍ら答へた。そして、優しく教へるやうに、

『これからはな、何でも商賣は開化向でなきや駄目なんだよ。』

と云つた。

『ほんとうだね、伊勢勝さんなんか、あんなにはやるんだものね。』

『そうともさ、今に御覧、みんながあんな洋服を着るやうになるんだよ、松田屋なんぞはこの銀座の喰べ物屋のなかでも一番の繁昌だ。それと云ふのも、四つ足の牛肉なんぞを煮て食はせるからだよ。お江戸は移り氣だからね。』

『お父さん、お江戸だなんて、おかしいや、東京じゃないか。』

『ハ、、、、違ひない。東京だつたね、だけど、お前だつて江戸と云ふ頃に生れたんだよ。が、ほんとうにお前がお父さん位になる頃にはこの東京もどんなに開けるか判らないよ。』

金太郎の生れたのは、正しく父の云ふ通り、萬延元年、櫻田の變のあつた年だつた。父の喜三郎は名古屋の生れたつたが、金太郎の生れる數年前に、母と共に江戸へ來た。

そして、同郷の者で、異人相手に、錦繪や、刀を賣り、異人からは、古眼鏡、毀れた時計、顕微鏡、コップ、洋書などを買つて、大きな儲けをしたと云ふのを聞いて、思ひついたのが古道具であつた。銀座裏の采女町に住んで、夜はわざと人通の多い銀座の表通を選んで露店を開いてゐるのであつた。

晝は金太郎と妻に店を任せて、自分は築地の異人屋敷や遠く横濱まで、いろんなものを買集めに歩いた。

ナイフやフォークの古いのから、ランプのホヤなどもあつたが、一度などは、確かに掘り出し物だと思つて、珍奇な西洋の陶器製の花瓶らしいものに、横文字の入つたのを買つて來て、露店に並べて得々としてゐると、恰度伊勢勝のお雇、ローマンが、客のない暇に店先へ出て來て、それを見付けた。

『それ、何か、アナタ知ツテキマスカ。』

『へえ、これですか。上等舶來でせう。お國の花瓶……』

鼻の高い、紅毛人はキヤツ／＼と笑つた。

『それ、違ヒマス、花瓶ナイデス。西洋のお酒の瓶デス。』

キユラソーの瓶だつた。僅かに、ビール瓶を、ギヤマンの徳利と思はぬ位が、喜三郎の鑑識だつた。

息子の金太郎には、目まぐるしいほどの、開化の有様が、別に不思議ではなかつた。それは、金太郎の成長と、明治の開化が同じやうに進んで行つたからであつた。

亡び行く江戸、騒然たる物情は、まだ頑是ない幼年の頃に、何も知らずに過した。物心がつくと、街には、妙な棒を持った、邏卒と云ふのが妙な姿で歩いてゐた。電信だの郵便だのもあつた。銀座の近くの新橋では、横濱へ通ふ陸蒸汽が發着して、つい最近に盛な開通式が行はれた。毎日、少しづつ銀座が、その度毎に様子を變へて來た。

人力車が、被布を着た奥女中のやうな女を乗せて走つてゐたし、馬が鐵輪の車を曳いてひだの多い袋のやうな洋服を着た異人の男女を乗せて通つたり、日本の女が、洋装して馬に乗つて横行したり、そうかと思ふと、松田屋の二階では、侍らしいのが、酔拂つて梯子段の途中で斬り合ひをやつたり、雜然混然としたなかに、ひた／＼と岸に寄せる波のやうに、異人の文化が押寄せて來るのを、ほのかに知るだけであつた、そしてそれは父の喜三郎などよりは、江戸の昔を知らぬだけに素直に呼吸することが出來た。

『お父さん、あたい、奉公にやつてくれない。』その夜、金太郎は突然父に申出た。

『何、奉公、どうせ商人になるならそりや奉公もよからう。けれど他人様のおまんまは苦

』

『あたいね、さつきお父さんの云つたやうに、文明開化の商賣が覺えたいの、道具屋だつて好いけれど、唐物屋の方がもつと好いと思ふんだよ。』

『ふうむ。』

父の喜三郎は、息子の利溲らしい顔をながめた。

(III)

金太郎は聽て、父の世話で京橋八官町の辻屋と云ふ唐物店へ望み通りの奉公が出來た。そこには洋服の附屬品や、メリヤスのシャツ、靴下などの類を賣つてゐた。

けれども、いくら歐化したと云つても、まだく唐物屋は左程毎日客が立て込むと云ふほどではなかつた。物珍らしさに覗いて行く客はあつても、入つて買求める客は稀だつた。毎日ボンヤリして、店に立つてゐるのも、大抵退屈なことだつた。兩袖に手をつくねて

銀座通りを眺めて暮すより外はなかつた。

「商賣なんて、何だつて、斯んなにつまらないのだらう、お父さんと、露店に坐つてゐる時は本も讀めたが、他人の店ではさうも行かぬ。一體、品物を店先に並べて、人が買ひに来るのを、ジツと待つてゐるなんざ、少々氣が利かない話だ。」
所在なさから斯んなことを考へるやうになつた。

「あ、ア、ア」

思はず大きな欠伸が出た。

「何だい、金公、店先で欠伸などしやがつて！」奥から番頭に呶鳴られた。

「へーい、相済みません。」

素直に謝つて、口に手を當て、ひよいと表を見ると、眞向ひは、小林と云ふ時計屋だつた。

その眞向ひの時計屋も一向に客がなかつた。けれども、時計店では、小僧までが、店先

に坐つて、しきりと、下を向いて、小さな木ネヂ廻しを取り出しては、いろんな細い機械を時計の側から取り出して、一心に仕事に耽つてゐた。

「好いなア時計屋じや、お客がなくても、あゝやつて何かやつてゐる。」

餘りの手持無沙汰に金太郎は、向ひの時計屋が羨ましくなつて來た。

「番頭さん、時計屋つてのは、何だつてあんなに、朝から晩まで、時計をいぢくつてゐるんです。」

講釋本を讀んでゐた番頭に話しかけると、番頭は面倒臭さうに、

「當り前だよ、時計は二六時中働くのが商賣だ。」と突慥どんに答へた。

時計は夜中だつて働いてゐるが、それにしても、小僧までが、何故働くんだらう——と思ひ乍ら、ぼんやり看板を眺めると、軒先の看板に、

「舶來各種御時計販賣、並に修繕」とあつた。

「そうか。」思はず聲を出した。

『何が、そうかだ。』

番頭が、妙な顔をして、本から目を放した。

『いえ、別に……』

『うるせえ奴だ。黙つてろ！』

又呶鳴られた。

金太郎はそんなことには頓着しないで、考へを續けた。

——そうだ、何時か、官員さんにお父さんが夜店で言つたつけ、八角時計だつて、古物でも一兩だ。新品なら五兩、懐中時計は八九兩で安いところ、上等は百兩もするんだ。すると小林さんでは、修繕が主だ。いくら開化の世の中だつてそんな高いものをザラに買ふ人はあるまい。お客のない時は修繕をして、修繕だつて、随分手間賃をとるんだらう。畜生、甘くやつてやがるな。斯んなにして、じつと店に座つてゐてお客の來るのを束ねて待つてゐるのは、全く間尺に合はないや、太公望の釣りじやあるめえし——。

分別らしく、金太郎は感心に斯んなことを考へた。そうなると、一日も早く時計屋へ奉公がしたくて堪らなくなつた。

十五日の休みが出ると、飛ぶやうにして采女町の家へ歸つた。

『お父さん。』

『何だい、上りもしないで。』

『お店を變つても好いかい。』

『どうした。何か悪いことでもしたのかい。』

『そうじゃないよ。』

『まあ、お上りよ、何だえ、お前。』

母が奥から出て來て優しく云つた。

考へてゐたことを、頬を染め乍ら、熱心に語り出す金太郎の話聞いて、父の喜三郎も母親も、自分の子供乍ら、感心なものだと思つた。

『宜しい。お前の量見は偉い。』
叱られる覺悟で訴へた自分の心持が通じたので少年の心も明るかつた。

(四)

辻屋唐物店から暇を貰つた金太郎は、再び父の世話で日本橋横町の龜田時計店の丁稚として雇はれることになつた。

それは金太郎が十五の春だつた。

龜田時計店の店頭では、八角時計や、ボン／＼時計、オルゴール入りの目醒時計、女神が片手に高く捧げてゐる大時計、硝子箱のなかにキラ／＼と光る、金や銀の側のなかに包まれた懐中時計、あらゆる舶來の、高價な時計が、どれもこれも、チク、チク、タツ、タツと銘々が快い音をたてゝゐた。

それは金太郎にとつて、素晴らしい音楽だつた。

けれども、金太郎のその喜びは、殆ど満たされなかつた。金太郎が店頭に出る用事は、皆無だつたからである。金太郎は、朝から晩まで、赤ん坊の子守が、與へられた仕事だつた。

『少し、おんもへ連れて行つておくれ。』

背中／＼泣き出すと、お主婦さんがそう云つて家から追出した。赤ん坊をあやし乍ら、子供が泣きやむと、金太郎は、そつと忍ぶやうにして、表へ廻つた。そして飾窓のなかを盗み見るやうにして、陳列の時計を眺めたり、店で修繕をやつてゐる、先輩の小僧達の器用に分解する機械をジツと眺めてゐた。

一人の店員は、八角時計を分解してゐた。先づ硝子蓋をネヂ廻してこぢ開けると、ポコンと巧みに取り外した。

二三の止めのネヂ釘を器用に抜くと、恰度、刀の目釘を抜いたやうに、すつほりと、時計の樂屋が現はれる。それは小さな齒車と幾つかの心棒とが重なり合ふやうにして出來て

るだが、軀て圓い鐵の箱のやうなものを、二つに割ると、中からは、黒くなつた機械油にベツトリした紫色の火焰を見せてゐる鋼鐵のゼンマイが取り出される。

『おゝ氣をつけてやんな、そいつが弾ぢけたら大變だぞ、俺の首なんか、その勢ひで刎ね飛ばされて了ふからな。』

主人が傍らで、小楊子ほどの小さなネヂ廻しを持ち乍ら、ボン／＼時計の小さなを修繕してゐたのが、恐ろしいやうに少し身を退いて、小僧に言つた。

『大丈夫ですよ、旦那、だけど、このゼンマイと云ふ奴は、恐ろしく長いんですね、それが、恚んな小さな中に巻込まれて、まるで蛇がトグロでも巻いてゐるやうなだから、恐ろしい力を出すんですね。』

キユウ／＼と音をさせ乍ら、ゼンマイを捲き返してゐる小僧の手付は慣れたもので、捲き乍ら巧に、反撥しやうとする、鋼鐵の張力を指先で抑へてゐた。

『恰度、何だね、人間の腸と同じだよ、おいらのお腹にや、随分長えものが甘く捲き込

まれてあるんだからね、あれを伸ばしたら随分なものだらうて。』

『そうですね、あたしはこないだ、松田屋での侍くづれの喧嘩の時、斬られた侍のお腹からはみ出てるのを見て、驚きましたよ。』

親方と話し乍ら小僧が、捲き返すと、何やら金だらひの水のやうなものに、それを浸すと眞黒な水になつて、鋼鐵のゼンマイが、いよ／＼奇麗に洗はれてピカ／＼光り出した。

あのベツとりした油のかたまりのやうなものが、すらりと溶けるのは、表口から覗いてゐる金太郎には不思議だつた。

『留さん、その洗つてる水は、何て言ふの。』思はず、つか／＼と赤ん坊を背負つたまゝ店のなかへ入つて行つて、だしぬけに聞いた。

驚いたやうに、ひよいと仰向いて、

『何だ、金公か、この薬の名を聞きてえのかい、冗談じゃねえ、年期を入れて覺へた極意が、手前達のやうな子守に、易々と教へられて堪るか。こりやね、越後の水だよ。』小僧

は先輩らしく誇り顔だつた。

『金公、店先へ何んだ、餓鬼なんぞ連れて、みつともないじやないか、店の邪魔だ。さつさと表へ行つてろ。』

親方に突慥食に叱られて、金太郎は見たくて堪らないのを、残念さうに表へ出た。無心な赤ん坊が背中で金太郎の鬚を、小さな手でしきりにかきむしつた。

當時では、アメリカと、スミスから、ほんの僅かばかりしか輸入されてゐなかつた時計で修繕のことなどは矢張り一種の秘傳になつてゐて、その修繕と云ふのも、大抵は器械を細く分解するよりは、只外側から取り外して精々ベンデン變りに、越後新潟から出る石油で機械油を洗つて、新しい油を差す位が大した仕事だつた。石油が油を溶かすと云ふだけでも、大變な知識だつた。

だから子守の金太郎などは、仲々そんな修繕の方は手傳はされなないで、結局、親方の赤ん坊の鼻汗を毎日背中にひつかけられ乍ら二年間が過ぎて了つた。

(五)

『金公、手前も、少し店を手傳ひな。』

或る日、仕事がたて込んだので、店の者だけでは手が足りないので、お主婦さんまでが狩り出された日に、金太郎も始めて見世の手傳を命じられた。

金太郎は初めて念願が届いたやうに、喜色を溢れさせて飛んで出た。

勿論、これと云つたことは出来もしないし、やらされもしないが、それが動機で、機械の洗ひや、そのうちには、機械の分解も出来、解つて見ると案外簡単な構造に、熱心が手傳つて他人よりは覚えが早かつた。

仕事を一通り教へ込まれると、親方の仲間である坂田時計店に、熟練工が必要なので、そちらへ廻されることになつた。坂田時計店は下谷にあつた。

金太郎はそこで初めて時計に關するいろんなことを覚え込んだ。

我が國に機械時計が傳はつたのは、何も明治初年ではなかつた。もう室町時代には傳來してゐたとも云ふし、天文十九年葡萄牙の宣教師ザビエルが、周防の大内義隆に献上したと云ふのが初めてであつた。

その後慶應十六年に朝鮮から徳川家康に獻じた自鳴磬が損じたのを、洛中に觸れて修繕する者を求めた時、名古屋常盤町の津田助左衛門と云ふのが、これに應じ奉つたのが、時計修繕の元祖とでも云ふべきであつた。

懷中時計は、正保元年に、矢張ポルトガル人が三代將軍に獻じた『根付自鳴鐘』が初まりだつたが、それは寛永十五年の鎖國令で輸入が杜絶した。

文政年間には、ロシアからオルゴール入りの時計が獻じられ『萬年時計』と稱へられたゼンマイ仕掛けの懷中時計が又入つた。

けれども、當時は西洋の時の計算法では、直に日本人の生活には實用とならなかつたので、『活則』とか便覧とかでなくては、日本の時と合はすことが出来ないもので、それは明治

初年までは、貴族や富豪の裝飾用か、玩弄物に過ぎなかつた。

長崎が開港となつて、江戸の庶民の間にもそろそろ手に入るやうになつてはゐるが、矢張實用には遠かつた。

それが、恰度、服部金太郎が、辻屋唐物店の丁稚で、小林時計店を羨まし相に眺めてゐた明治五年になつて初めて、舊曆を廢し、太陽曆が行はれるやうになつて、時計商もそろそろ町に店舗を設けて商賣になるやうな時勢が來たのだつた。

時計の製造は、京都、大阪、名古屋、江戸、仙臺等の各地で大名の御抱えの時計師が、助左衛門以來輩出してはゐた。

弘化三年には、大阪の牧方に住んだ正吉と云ふ男などは、小型の指輪時計の精巧なものを作つたり、嘉永三年には田中久重、通稱儀右衛門と云ふのが、萬年時計を作つたりしたから既に國産の懷中時計は出來てはゐるが、それはまだ廣く世間に行はれたものではなかつた。

金太郎の勤めた坂田時計店の主人は、舊幕時代からの代々時計師の家だったので、金太郎が、修業をするのには都合がよかつた。けれども、坂田時計店でも、まだく時計を製造するには到らないで、毎日毎日修繕ばかりを引受けてゐた。

懐中時計の大型、廿一型を白ちりめんの兵児帯の下に、わざと覗かせて歩いて得意になつてゐるのは、俸祿賜金を貰つた舊藩士達で、新橋、柳橋で遊んでゐるお座敷でも、この懐中時計は、藝者達の心を釣るのに必要な道具となつてゐた。

龍頭が抜けたり、ゼンマイを捲き過ぎたり、じつと持つてゐられないので、修繕屋は殊の外忙がしかつた。

こゝでも二年の歳月が流れた。金太郎は漸く一人前の時計修繕工となつたが、可成り繁昌した坂田時計店は、景氣の好いのに任せて、他の事業などにも手を出して、そのために破産の悲運を招いて、遂に店を閉ぢなければならなかつた。

主人は一錢の金もなかつた。店のものは別にして家財だけを賣り飛ばして、何か明日か

ら糊口の料を稼がねばならないやうな破目だつた。

金太郎は、僅かな給金のなかに、貰ひ溜めた金七圓を、主人の前に差し出した。

『永らく、御厄介になつた御恩返しです。どうかこれつばかりでも、何かの足しになさつて下さい。』

『雇人からそんなことをして貰ふわけはない。』斯う云つて主人は辭退したが金太郎は、

『いゝえ、私の念願の、時計の職を覚えさせて戴いたお蔭は、御主人様の御恩で御座います。この仕事こそは、私の一人の寶なんです、どうか御納め下さつて。』

金太郎は、七圓の辛苦の結晶をすつかり、主家の前に再び押し出した。

腕に覚えが出来たので金太郎は朗らかに、采女町の父の家へ久しぶりに歸つて行つた。父の喜三郎は矢張り古道具屋を開いてゐた。

『お父さん、私はもう手に職が出来ましたから安心して下さい。當分、お父さんのお店の手傳ひをし乍ら、私は古時計を買ひ集めてこれを修繕して、お父さんの店で賣ります。そ

して、儲けの幾分を私に下さい。それを貯めて、私は自分で時計屋を開くんです。』
もう十九の青年になつた金太郎は、數年間他人の飯を食つて來たので、立派な若者になつてゐた。

父は喜んで、成人した息子の健氣な申出を受けた。

『そりや宜いとも。それじゃ、このわしも、一つ明日から、なるべく時計の品集めを手傳はうよ。まつたく近頃は店へも時計があると、直ぐ賣れて了ふんだからな。』

親子は、毎日のやうに、仲間うちや夜店などを漁つて歩いた。毀れた時計、役に立たないやうな部分品、何でもみな買集めた。

父の古道具屋の店の一隅には、小机を置いて、古物の毛氈を敷いて、そこが金太郎の時計修繕工場となつた。

父は、息子の金太郎が、六つかし相な機械をバラバラにして、眞鍮の棒や齒車だけに分解するのをハラハラし乍ら見てゐた。

『金太郎や、大丈夫かい。それが元へ納るのかね、納らないと元も子もなくなるよ。尤もそれは、お父さんが囃鼓町で、八錢で買つて來ただけだ。』

『大丈夫ですよ、お父さん、これが、もう一時間もすると、さうですね、結構三兩なら賣れますよ、坂田に居た頃は、これで八九兩は間違ひのない値段ですよ。』

棄て値同然の毀れ物を買つてはこれを修繕して相當の値段で賣つたから、時計屋よりも安くて賣足は早かつた。

朝から晩まで斯うして面白いやうに働いたが夜は暇を見て、京橋の大工町に住んでゐた漢學の大家中村正直のところへ通つて、一通りの勉學も怠らなかつた。

そうして、希望に満ちた四年間が、然かも父母のもとで、すらくと進んだ。

或日、父の喜三郎が金太郎を呼んで、そして金太郎の前に大東の新紙幣が重ねて置かれた。母も威儀を正して座つてゐた。

『金太郎、そこに百五十圓ある。それは、みんな、お前が、坂田さんから歸つてから、そ

の腕、指の先で作り上げた身上だよ、何なりと、お前の自由にして好いお金だ。』

『お父さん、百五十圓にもなりましたか、有難う御座います。私はこれを使つても宜しいのでせうか？』

紙幣の束を見て、今更のやうに金太郎は、胸をときめかせた。

『好いどころではない。この何年か、お前は働いてばかり居たんだ。洋服の一つも拵えてはどうだ。』

『飛んでもないことです。お父さん、それではどうか一軒家を借りて下さい。小さいんで宜しい。そうだ、お父さんやお母さんの近所が好いな、私は店を自分で持ちたいのです。』

『そうかく、もう宜からう、それでは明日にもこの父が探して上げやう。』
恰度同じ采女町に、格好の家があつた。そこに、百五十圓の資本で、さゝやか乍ら一軒の時計屋を開業した。古物を修繕したものばかりだつたが、店先では、柱時計や八角時計が壁一ぱいに掛つてゐて、硝子のケースには、懐中時計が十數個輝いてゐた。

チク／＼タツ／＼、その昔、小林時計店、龜田、坂田の店で鳴つてゐた音が、店先に座つてゐる金太郎の耳に、彼方此方から響いた。

それは悦びに満ちた、金太郎の心臓の大きな鼓動と一緒に鳴つてゐた。

母は毎日のやうに店へ来て、何くれと世話をした。父もどうかすると、自分の店を閉めて様子を見に来た。客は毎日、店先に足を停めた。

それが金太郎二十二歳の春だつた。二年間に資本金の十倍、貯金が千五百圓となつた。

銀座の面目も漸時變つて来た。道路には舗装が出来上ると松と、櫻の街路樹も植ゑられた。石鹼が銭湯で使はれる。巻煙草の吸殻が街路に落ちるやうになつた。日本製のマツチが出来た。開業の明治十四年には、第二回内國勸業博覧會が上野で開かれて、お上りさん達が銀座通りをぞろ／＼歩いた。

金太郎の店は開業早々斯んなお客さんのお土産にも歓迎されて繁昌したのであつた。

金太郎の前途には、測り知れない希望が輝いてゐるが、明治十六年、銀座通りをペロリ

と嘗めた大火が、苦心の殿堂をも一夜にして焼いて了つた。

『金太郎、道具箱はお父さんが持ち出したよ。』父が悄然と風呂敷包を持って立つてゐた。

『有難う、私は、夢中で、何でも彼でも手當り次第に、店の品物を行李に投げ込んで擔ぎ出しましたよ、毀れたつて、修繕すりや好いんですからね。』

親子は焼跡に立つて、淋しく笑つた。

(六)

木挽町に新らしく一戸を構へた。もう二十四歳の立派な青年だつた。災厄に打ち負かされることもなく、業を勵んだ。

『何時までも、古物の修繕では駄目だ。少しは上等品も店に並べたいものだ。』

金太郎は斯う考へ乍ら、みすばらしい焼け残りの品を見乍ら、不圖思ひついたのは、横濱にある外國人の輸入商、アイザツク・コロンの顔であつた。坂田時計店へ時々顔を見せ

たあの異人の顔。

『そらだ、コロンさんに頼まう。』

金太郎は、始めて横濱へ、汽車に乗つて出掛けた。

コロンは、豫て見知り越の青年だつたので、事情を聞くと、無條件で、品物を渡すことを承諾した。

店頭には、今までとは全く面目を一新した、燦然たる時計類が並ぶやうになつた。世間も漸く進んで來たので、そろそろ都人は、懷中時計の新型を求めてゐた。

『直輸入服部時計店』金太郎は看板に新らしく直輸入の字を入れた。

他にも、横濱のコロンから買入れる人達はあつたが、いづれも舊時代の商取引で、月末勘定の約束だつたが、半年拂ひなどを固執して、コロンを當惑させてゐたが、金太郎は品物が捌けても捌けないでも、月末になると財布をつかんで横濱へ駆けつけた。

『服部さん、正直、品物いくらでも上げませう。』

コロンは漸々金太郎を信用するやうになり、終には自分で出掛けて来て、新しいカテゴリーや新品新型の荷がつくと、一番先に金太郎の店へ持つて来るやうになつた。したがつて服部時計店の節窓には、何時も目新しい珍奇な型が並べられて、人目を惹いてゐた。金太郎は鎖を四角にして、そのなかに營業種目を書いた一種の商標をつけて、金が出るに従つて、コロンのすゝめを聞いて指輪や、寶石類もその種目のなかに加へて行つた。服部時計店の名は日増しに都人の間に知られた。明治二十年には、銀座の表通りへ出て四丁目店を移し、二十五年には早くも、十五萬圓と云ふ資産が出来た。

そこで、本所石原町にいよいよ掛時計製造の工場を建てた。今日の精工舎の始まりである。技師長に吉川鶴彦と云ふ人を聘して、自分も共に働いたが、それでも全部で従業員は僅か十名足らずであつた。

それまでに、明治八年頃に、麻布に水車を利用して、時計製造の機械化を計畫した人があり、その後もいろんな人が目論んだが、いづれも失敗に終つた。

服部金太郎は、精工舎を起したが、矢張始めは人力で、家内工業的に製造を試みた。修繕からいよいよ製造へ。そしてその年の七月に、とにかく出来上つたのが、掛時計一ダース。それが、ポン／＼と勇ましい振子の音と共に鳴り出した時には金太郎は涙を流してゐた。父の喜三郎も母も、その出来上る日には、工場のなかをうろ／＼してゐた。

掛時計一ダースが成功したので、いよいよ動力を使ふことにしたが、本所では許可が出ないので、明治二十六年に現在の本所柳島に移つた。そこはまた大名の下屋敷と、百姓家が点在してゐるやうな淋しいところだつた。

明治時代の代表時計、歌にまで残つてゐる二十二型の懐中時計、かうした型の大きいのが當時の流行だつた。それをねらつて、金太郎は、いよいよその製造に入つた。その動力は七馬力の蒸氣動力だつた。

三年目の二十九年に、二十二型シン式が出来た。續いて時計製造機を作つた。その年にアメリカ人が神戸から汽車で上京の途中、驛賣の茶の安いを見て、斯んなに物價が安

いなら、時計なども、日本で作れば工賃が安いから、と大合社の設立を計畫し、これに故澁澤榮一、大川平三郎、浅野總一郎などが加はり、服部氏も一口乗つて、やりかけたが、それが大きなベテン師だったので、それからはいよく自分獨りで、國産を心掛けたが、どうしても本場を見る必要に迫られて、明治三十二年から一年間、本場のスィツルを始め、ヨーロッパ諸國を巡遊して、歸朝すると、早速その年に、ニツケル製の目醒時計、三十五年には角時計を作り出した。同時に、十四型メリケン式懐中時計を完成し、續いて當時の流行の尖端であつた十二型に成功し、これを『エキセレント』と名付け、遂にこれは帝國大學を始め各學校で、聖上より御下賜になる『恩賜の時計』の御料とまでなるやうになつた。

日露の役で、軍用品を納めて、いよく盛大になつたので、今度は三十九年に、吉川技師長、吉邦支配人も共に伴つて、再度の洋行をして、新型十六型が出来て、これを『エンバイヤ』と名付けて、輸入品に劣らぬものが始めて出来た。

大正三年に十二型女持懐中時計が出来た。そして創立二十二年目には、五千七百坪の大工場に二百五十馬力の動力を据付、千三百人の使用人となり、歐洲大戦では一時政府のすすめでロシアの軍需品を引受けたりして、益々氣焰を擧げ、大戦後は一年に百萬個の時計が製造されるやうになつた。大正大震災のために、さしもの大工場も一朝にして崩壊したが、猛然として復興に努め、大正十三年には舊態に復した。

昭和二年には勅選議員となつた。

モダン銀座の中央、尾張町の街頭に昭和八年初秋、七階建の大建築を建て、都人を驚かせた服部時計店！

これこそ金太郎が銀座に終始した最後の文字塔である。

橫
山
大
觀

(一)

水戸の天狗に逆ふ奴は、出らば出て見ろ、ぶつ殺す
物凄い唄が流行つた。

筑波山に立籠つた天狗黨の噂さは、物情騒然たる幕末の空気のなかにあつて、水戸の城下を中心に、一入の不安を加へて行つた。

天狗騒ぎは、筑波山麓から、近在へかけて、一帯の民家を脅かすやうな噂が、次々へと傳つて行つた。

それが正義のためであるか、不正を訊すためであるか、そんなことは一般の民家に判断がつく筈がなかつた。

百姓や商戸の人々には、何よりも不安が感じられた、渦を巻いてゐる水戸の家中でも、藩論について、いろいろ議論を戦はしてゐる人々にこそ、何物かを感じてはゐるたが、多

くの家中の、殊に女、子供には、何が何やら兎にかく世の中が騒々しくて、何となく不安だと云ふより外には感じないやうな有様だつた。

流言と蜚語が、暗夜に走る火事場提灯のやうに華かに飛んでゐた。

平和な水郷に泰平を續けた、大利根の流域の百姓達が全く肝をつぶすやうな事件が、次次へと起つた。

村の分限者が、翌朝は松の木に、その首をさらされたり、庄屋の藏に押借りに來た侍のために、千兩箱を持ち去られた上に、醜骸を路傍に見せたやうな事件は矢繼早やに傳はつた。

それ等は、どれもこれも天狗黨の神出鬼没の仕業だと思はれてゐた。全く天狗黨と云ふのは始め、六十三人だつたが何時の間にか、筑波山に集つた人々よりも、餘程その同類の數が多いやうに思はれるやうになつた。

天狗黨の噂さは、斯うして噂さを生み、實際の徒黨の數も増して、日光へ、水戸烈公の

位牌を捧げて、葵御紋の旗印を押し立て、宇都宮街道を、悠々と行列を揃へた頃は、大變な勢力となつてゐた。

幕府から眞劍になつて、追討の軍が立つてからは、再び一黨は筑波山に立籠り、時々執拗に、里を荒したが、遂に窮鼠となつた天狗黨は、奇策を用ひて、水戸の城下へ、旗鼓堂と攻めて来る日が来た。

水戸の城下も、そのために、屢々砲火の洗禮を受けた。

ドウン／＼ドド……と聞いたこともない、物凄いな音が、遠くに響いて来た。シュウ／＼と音を立て、火箭が空を走つた。

城下の人々は、家財を持てるだけ持つて、とにかく町から離れた方向へ走つた。

屋敷街でも、騒ぎは同じだつた。誰れが味方で誰が敵だか判らないやうな、同じ藩中の争ひのなかで、とう／＼御城下に火がついたとなつては、家中の女に子供は、たゞうろたへ騒ぎ、火難を逃れるより外はなかつた。

大きな大鼓腹を抱えて、酒井捨彦の女房、する女は、家中の人々と共に、身を以つて城山の奥に走り出た。

薄氣味の悪い音をたて、鐵砲の玉が飛んで来る。

地震の時には、竹藪の中に逃げ込め——そうしたことを子供の時から聞いたのを、つい思ひ出して、兵亂も、地震も、突嗟に同じことと考へて、山の藪を求めて逃れ出た。

なかには戸を背負つて楯としてゐる男もゐた。壘を外して、これを楯としてゐるのも居た。女の身で、然かも、もう臨月の、酒井する女は、他の人々のやうに、死物狂ひに駆け抜けるわけにも行かなかつた。

喘ぎ乍ら、半ば、恐ろしい砲聲や、銃の音に、氣も遠くなつて、逃げる。と、云ふよりは、お腹の子供が………と云ふ氣だけで、本能的に、氣持を締められて、ガヤ／＼と逃れて行く人の後について出た。

竹藪があつた。町人も家中の女も、日頃の階級意識を忘れて、みなわな／＼と顫へてゐる

た。

『おゝ、竹藪。』

する女は、轉ぶやうにして、その群れのなかに飛び込むと一度に氣がゆるんだ、と同時に、抱くやうにした下腹部に、異常な痛みを感じた。

『おゝ、どうなすつた。』

堪え難い苦痛に、つゝしみも忘れて竹藪の中にもだえるする女を見つけた町の男が叫んだ。

『おうい、誰か、女の人はるねえか、この騒ぎに、お産だよ、どうもこりやア。』

男が、城下の恐怖をも忘れて叫んだ。

流石に女は、女連れだつた。命よりも大切に喘ぎ乍ら、背に重く運んだ、座布団や、着布團を外して、それを藪に解いて敷いてくれる女もあつた。

さうした異様な混亂の、又とない歴史的な混迷のなかで、オギア、の聲を擧げた赤ん坊

が、明治となつた水戸の屋敷町で健やかに育つて行つた。

竹藪で生れた酒井する女の赤ん坊は、秀麿と云つた。

秀麿の家系の酒井家は、代々水戸藩に仕へた家で、秀麿の曾祖父、酒井市之丞喜昌は、藩の勘定役を勤めて名があつた。水戸の碩學藤田東湖の父、幽谷とは親交もあり、水戸藩の財政を堅めた、英傑として知られてゐた。したがつて、酒井家自身の家政も、共に裕福で、可なりの産を残したが、その嗣子はまた全然反對の性質で、全然理財にうとく、その代りに變つた技能があつて、地理學に委しく、地圖を描くことなどに堪能であつた。

秀麿は、地理學に堪能で、理財にたけない人の孫に當つてゐて、する女の夫、酒井捨彦の胤であつた。

父の捨彦は、次男で、長男喜雄と云ふのは、これは又理財とは縁の遠い家中でも有名な歌人であつた。

秀麿の父捨彦には、外に、澁江信夫、宗孟寛などの弟があつた。

秀麿は、戸籍面では、天狗騒動などが全然納り切つた、幕末の空気が一新した、明治元年八月生れとなつてゐる。

これが、今日、日本畫壇に、下村觀山なき後の唯一の大御所と謳はれてゐる、帝室技藝委員横山大觀である。

(二)

秀麿の父捨彦は、父祖の血を享けて、矢張り製圖に功みであつたので、御維新後は、東京に出て兄弟と共に、その親からの技能を以て糊口の道を開いてゐるが、明治七年になつて、秀麿の父捨彦は、茨城縣となつた縣廳の測量師として、郷里へ歸ることになつた。けれどもその頃は、父祖代々、水戸市の三の町の舊屋敷はなく、鳥見町の某家の間借をするに云ふ、まことにさゝやかな生活であつた。

測量器と巻尺と検棒とを持つては、全茨城縣を、次から次へ廻る父の生活は、秀麿の生活をもその度に轉々とさせて、或は土浦に、磯ヶ濱に、親子三人が流轉の生活であつた。けれども、秀麿が水戸市の小學校に通ふ頃には、父の家もやうやく水戸に落着くやうになつた。

その頃、父の捨彦は、縣令から政府へ贈る、全縣下の地圖の作成方を命ぜられて、自宅に歸つても、細い仕事に熱中してゐた。

『お父ちゃん、何してんの。』

秀麿は、自分達が砂の上に、矢鱈に棒で筋を曳くやうな、うねりくねつた、妙なものを毎日々々紙に描いてゐる父の仕事の不審に思つた。

『黙つて〜、お父さんはね、縣令様の六つかしい御仕事をしてゐらつしやるんだから、おとなしく、邪魔にならないやうに、外で遊んでゐらつしやい。』

母に諭されては、外に出て遊んだが、父が紙の上に描いてゐる、うねりくねつた線に苦心してゐる様はどうしてもわけがわからなかつた。

何時になく、両親が朗らかな顔をして、座敷に坐つてゐた。そして座敷一パイに、妙な
圖が描かれた紙が擴げられてあつた。

父が、永い間してゐた仕事が完成したことは、幼い秀麿にも理解が出来た。

『お父ちゃん、お仕事がすんだの。』

秀麿は、永い／＼間絶えて見なかつた父の笑顔が何より嬉しかつた。母も、何となく明
るい顔をしてゐた。

『うん秀麿や、やつとお父さんは肩の荷が降りたよ。』

『それ、何アに。』

『これはね、茨城縣の地圖なんだよ、縣に澤山の村がある、その村をみんな、お父さんが
歩いて調べて描いた地圖だ。これを縣令が、政府へ納めなさる。わしはそれをやつと仕上
げたんだよ。これも、考へて見ると妙な因縁だ。わしのお父さん、つまりお前のおぢいさ
んも、矢張り、地圖が上手で當時の將軍様へ、關八州の地圖と、地球儀を作つて、献上なす

つたことがあるんだよ。けれどもなア、おぢいさんの時は、まだ良いとして、わしのやう
な、此んな職人のやうな、圖引じや一生うだつが上らない、坊やは、大きくなつたらもつ
と、何か外のことでも偉くなるんだよ。』
父はつく／＼と云つた。

(三)

明治十一年、西南戦争が終つたりしてから父は再び東京に住むことになつた。

神田五軒町妻戀坂に、父の兄弟が共に開いてゐた、測量地圖の製作を教授せる時習塾と
云ふのに、父の捨彦も加はることになつた。當時は、維新後の盛んに起る土木のこと、共
に必要だつた製圖は、自然に多くの門弟を集めて、有名な塾となつた。

そこで、秀麿は湯島小學校に通ふやうになり、別に、父が松平子爵の地所内に、一戸構
へて塾を其所に轉じた頃には、秀麿も漸く小學校の課程を終つた。

秀麿、十二の時に、弟の治樓が生れたので、親戚の横山姓を繼ぐやうになつてゐたので、その時から、横山秀麿となつたが、自身では、中年まで、酒井の姓を使つてゐた。

湯島小學校を出ると、その年、明治十四年に、現在の府立第一中學の前身、東京府中學校へ入つた。

中學に入ると、當時は殊に、同中學には全國の秀才が集るの感があつたので、小學時代は左程でもなかつた秀麿は、故郷の水戸ッほ魂が手傳つて、人知れぬ勉強を續けて、忽ちに二年から三年への進級試験では、抜群の成績を示したので職員會議の結果、一級を飛び越して、四年級へ進めることになつた。

かくて秀麿は明治十八年に首席で中學の課程も終つた。

『お前は、横山の姓は繼いでゐるが、矢張り酒井家の筋に相違ない、幸ひ、お前は、新しい學問を進めて來たのだから更にその學を基礎として、工部大學へ進んで、お父さん達のやつた製圖よりは、もつと進んだ、立派な製圖の家柄となつてくれ。』

父は頼母し氣に云ふのであつた。

工部大學へ進むには、大學豫備門と云ふのがあつた。秀麿は、父の望む通り、工部大學へ進むことを志して、大學豫備門の試験を受けることにしたが、同時に、大學豫備門に附屬した英語専修科を修業すれば、半年で、大學豫備門の第二級に進めると云ふ近道があつて、然かも、それは中學校卒業のみに與へられた特權だつた。そこで秀麿は、兩道をかけて受験したところ、兩天秤にかけたことが判つて、折角、第一位でパスした専習科の入學も取消されることになつた。

水戸ッほのかんしやく玉が破裂した。

『もう、大學など入るものか。』

數日を悔し泣に泣いてゐた。

西洋の學問が、そろ／＼擡頭して來てゐたので、秀麿の負けじ魂は、自然その方へ傾いてゐた。

『西洋へ渡つて學問がして見たいんです、日本の大學など、見返してやるのです。』
その頃、秀麿の父は、いろんな新しい事業に手を出して家には、到底秀麿の洋行費を生み出すほどの家産はなかつた。

そこで、東京英語學校と云ふのに入つた。その間に、當時起りかゝつてゐた油繪を、五性田芳柳の門下、渡邊文三郎氏に就いて習ふやうになつた。それは油繪と云つても、ほんとうは鉛筆畫であつた。

そのうちに、東京英語學校の三年の課程が終つた。

(四)

その頃、明治二十年前後は、有名な鹿鳴館時代を現出した極端な歐化主義の風靡した時代であつた。

西洋畫が漸々に、石造や煉瓦の家と共に盛んになつて行つたが、一方には我が國の明治

時代の美術界の恩人とも云ふべき、米國人フェロノサの指導で、日本固有の繪畫が、却つて足かためをしたのであつた。

狩野芳崖や、橋本雅邦などが、明治畫壇の先驅者となつたのも、全く、外國人のお傭教師として、帝國大學に居たフェロノサの力であつた。

文部省に圖畫取調所が出来、廳で、それが明治二十年十月四日には、東京美術學校と改稱されるやうになつた。

美術學校となると、先づ五十名の生徒を募集することになつた。

これを聞いた秀麿は、何となく氣が動いた。こゝで始めて畫家にならう——と云ふ決心が生れたのであつた。

一旦決めたとなると、後へは引かない秀麿の性質を知つてゐる兩親は、大學へ入ることを望んだけれども、澁々乍らも承知するより外はなかつた。

試験の日が來ると、志願者は三百人を越えてゐたので、豫備門に劣らぬ激しい競争試験

を受けなければならなかつた。

最初は鉛筆畫の願書を出してゐたが、途中から日本畫に志望を變へたが、秀麿は首尾良く入學することが出来た。

豫備門の入學試験で、へし折られた客氣が始めて蘇つた。

『何養、大學なんかど何だ、僕は偉大な美術家になつて見せるぞ。』

當時非常な勢ひで起つた、日本美術の復興運動を、ほのかにも、負けず嫌ひな秀麿の反撥心に反射して、遂に將來の大天才を、恚うした動機から、畫壇に導いたのであつた。

父の家計に左程の餘裕のないのを見た秀麿は、美術學校に入學すると共に、學費を自分の力で稼いで通ふ決心を堅めたのであつた。

幸ひ父が、製圖の方で知られてゐたので、その縁故をたどつて、教科書を出版してゐた金港堂の、西洋地理書の翻譯の挿畫の模寫を引受けさせて貰つたり、文學雜誌の挿繪などを描いて、月に十四五枚で三四圓の收入を得て、五年間の美術學校の生活を送つたのであ

つた。

當時の校長は、有名な岡倉覺三であつたことは云ふまでもない。岡倉覺三は横濱の下宿屋の息子だつたが、そんな關係で英語を早くから學び、十七八歳で大學を卒業し、文學士になると暫く文部省に勤めてゐたが、後フェロノサと共に佛蘭西に西洋美術の調査に出掛け、歸朝すると圖畫取調所が美術學校となつたので、初期の校長に選ばれたのであつた。まだ海軍省の、月給十圓のお雇ひで、繪圖面などを描いてゐた橋本雅邦が教授になり、淺草の提灯屋の息子だから、『ブラ兼』と云はれてゐた彫刻家の竹内久一が教授になつたのもその頃であつた。

だから、學校と云つても、何處か製作以外にはのんびりしたところがあつた。

明治二十六年いよく美術學校を卒業する時に、一同と共に卒業製作をやつた。

銘々に苦心の傑作をと苦心したが、秀麿の製作は『村童觀猿翁圖』と云ふのであつた。

それは、猿廻しの翁が十一人の村童を集めてゐる圖であつた。

猿廻しの翁は、恩師の橋本雅邦、十一人の村童は、同窓生十一人と云ふ見立で、その大作は非常な評判となつて八十六點と云ふ、級中で最高點を貰つたのであつた。

苦學の中にいそしんだ學校生活が終ると、焦うして華々しいスタートを切ると、直に招かれて京都の美術學校の助教授に任ぜられて、山紫水明の京都に赴いた。

そこには竹内栖鳳が矢張り共に教鞭をとることになつてゐた。そして京都で、畫家が打ち揃つて、大展覽會を開くことになつた。

秀麿の助教授にも出品をすゝめられた。その時の出品は、『武藏野』と云ふ一畫であつたが、その時の落款は、まだ本名の『秀麿』であつた。

その時の作品は、轉々して現在では朝鮮京城の一流の某旗亭に珍藏されてゐる。『秀麿』の本名では、落款にふさはしくないと思つて、諸書を漁つて、適當な雅號を探して、『大觀』といふ二字を得たが、まだその落款を使はなかつた。

明治三十年に母校から呼び返されて、東京美術學校助教授となつた年に、繪畫共進會

が開かれた。

その時に出品した繪は『靜寂』と云ふのであつた。それに初めて『大觀』と落款をつけた。これが大觀の名を世に出した最初であつた。

(四)

その翌年であつた。

有名な美術學校の教職員の總ストライキが起つた。

校長の岡倉覺三氏は、當時の新人であつて、近代美術新興運動の大恩人であつただけにその教育方針も極めて、自由で、民衆的であつた。そして絶えず、何か新しい開拓を志してゐた。

當時彫刻の高村光雲翁も、その下に教授であつたが、その懷古談に依ると、

——岡倉先生は、物の五六分も同座してゐると、これが名高い岡倉さんだと知つてゐるな

くとも、何となく常人と違ふ感じがして、威壓されるやうな人でした。

その癖、一緒に酒など呑んでゐる折は、始終冗談を云つたりして、少しも固苦しいところはないのですが、併し何處かに、非常に鋭いところがあつて、此方も茫然してゐられない氣が起きます。

先生が美術學校長をしてゐた時分、何か一つ改革意見が心に浮ぶと、素知らぬ顔をして、私達を一人宛校長室へ呼んで平常話のやうに、

『何か、學校の事で、思付いたことはありませんか、もつと改良進歩させる點はありますまいか。』

など、訊ねられる。此方に何か平素に準備があれば、斯うく云ふ點を改良してはと切出せる。それが岡倉さんの考へと、ピッタリ符合すると大變喜んで、

『其處だ、全くその通りだ、早速改良しませう。』

と云ふやうなことになる。が全く何も考へがないとか、又は考へても、夫が先方の考へ

に一致しないと、厭やな顔して黙つてゐられる。

『失敗つたな』と云ふことになるのだが、兎に角、何にも考へないと機嫌が悪い。

そこで、ストライキの原因と云ふのは、恚う云つたやうな岡倉覺三氏の態度に、巧みに取り入つて、自分だけが非常な信任を得てゐると、岡倉氏の慈愛をはき違へて、頗る増長した振舞ひを、時々ほの見せる、一圖案科の教授に、福地復一と云ふのがあつた。

偶々、岡倉校長は支那へ旅行した。その留守中に、第二回卒業の、故菱田春草の卒業製作『寡婦』についての審査採點が行はれた。

教頭の橋本雅邦が、繪を順に見た。そして菱田春草の繪の前に立つた。

『うん、これは良い、先づ本年の首席は、この繪かな。』

雅邦が一同を顧みると、傍らの教授連も既にその優秀さを讃へてゐたところなので、一同が賛意を表した。

『これが、首席、これが一體、繪になつてゐると思ひますか、馬鹿々々しい。』

憎々し氣に云ひ放つた男が、福地復一だつた。

『繪ではないとは何事です。』温厚な雅邦は流石に色をなした。

『繪になつていないから、繪でないと云ふのです。』

福地は、校長の信任をたのんで、教頭の雅邦に喰つてかゝつた。血の氣の多い高村光雲が怒鳴つた。

『黙つてろ、小癩な野郎。』

まだ職人氣質のとれない、下町育ちの教授が、とう／＼啖呵を切つたりする騒ぎだつた。

豫てから苦々しく思はれてゐた福地は、とう／＼岡倉校長が支那から歸つて來ると、高村光雲が先鋒となつて、橋本雅邦、劍持庶務係の三人が迫つて、福地に辭職を勸告した。故下村觀山、横山大觀の二人も、共にその場にあつたが、怪しからんと憤慨した方であつた。

そんなことで、福地は學校を辭めた。岡倉校長の信任を過信した彼は、容易に辭職の手續を執つた岡倉校長を怨むやうになつた。

そこで、故大村西崖と共に組んで、岡倉校長の私事暴露を始めて、執拗に仇討をやり出した。

文部省當局では、教育者としての私事暴露が、世間にあることないこと傳はるので、當惑して、岡倉校長を被免するやうな噂さが立つた。

(五)

當時美術學校の職員は全部で四十名近くだつた。

『日本美術界の恩人、岡倉先生を傷けるのを默視出来るか。』
教授界が一しきり騒ぎ立つた。

『岡倉先生の處置を、當局がはつきりするまで、我々は新學期が始まつても、教壇に立た

ぬことにしやうではないか。』

『そうだ、先生のストライキと云ふ、前代未聞のことをやるのじや。』

『賛成々々。』

殊に若い、まだ學生の氣のとれない、寺崎廣業、西郷孤月、櫻ヶ岡三四郎、囑託になつてゐた、そも／＼問題の起りを作つた菱田春草、六角紫水、横山大觀の六人の少壯組の鼻息が最も荒かつた。

とう／＼新學期を控へて、美術學校の門は堅く閉ざされて了つた。

文部省では驚いて、取不敢、現奈良博物館長久保田熙氏を校長代理に命じて、罷休してゐる教職員を、一人々々呼び出して、いろ／＼と説伏して、結束を破つた。

それでも三月ほど頑張つてゐたが、順に一人減り二人減つて、大觀等の少壯組六人を殘して殆んど復校することになつて學校騒動は終熄した。

『こんなストライキなどに参加するとは、國賊に等しい行爲ですぞ。』と脅かされて、ふる

へ上つて復職した先生もあつたと云ふ話だつた。

恩師橋本雅邦を中心にして、岡倉氏を擁して、最後まで踏み留まつた六人組へは、懲戒免官の辭令が送られた。

『大體、免官だとか、何だとか、自由なるべき美術家が、こんな小役人の眞似なんかすることからして間違つてゐるんだ。』

免官辭令を冷やかに見乍ら血氣の六人が意氣軒昂だつた。

恰度本郷湯島天神鳥居前に、巡查合宿所の後が空家になつてゐたので一同はそこに陣取つて復職組をへいげいしてゐた。

嘗つて、教員會の席上で、いんげんな大村西崖に憤つて、刺身皿を頭からぶつかけて、その上へ桐の丸火鉢をおつ冠せたと云ふほどの亂暴者の熱血兒、西郷孤月や大觀は、酒を啣り乍ら、毎日巡查合宿所で氣焰を擧げてゐた。

『自由にして、囚はれざる美術、役人臭い美術なんか糞喰へと云ふ運動を起すべきだ。』

例の水戸魂が物を言つた。

岡倉、橋本の兩氏も熱血の頼母しい残つた門下生を眺めて、窺かに期するところがあつた。

廳で、そこには『日本美術院』と墨痕鮮かに書かれた大看板が擧げられた。

官僚に對する畫壇の第一矢であつた。

『先生、早速看板を擧げた以上、展覽會を開いて世間に眞價を問はねばなりません。』

大觀等は力んでゐた。

米國人のピケローと云ふ、日本美術の愛好者があつた。その人が岡倉氏の擧を聞いて、

金一萬圓の同情資金を送つて來た。

それに勢を得て、谷中初音町に二棟の研究所を新築して、一同は合宿所を引拂つた。

下村觀山も學校を辭めて、そこに馳せ參じた。そして明治三十一年の秋、官權萬能の中

に、民軍の意氣を示す力作を描へて、第一回の展覽會を開いた。

川村清雄が客員として加はり、洋畫も出品するし、六角紫水が工藝を出品して、日本畫のみに偏せず綜合美術の形式と内容を見せて、世間をアツと云はせた。これが今日の帝展に對して、一敵國をなしてゐる院展の發生であつた。

(七)

大觀は一方にあつては、恰度その時に開かれた、日本繪畫協會の第五回展覽會にも、別に優れた力作『屈原』を出品して、首席銀賞を忽ちにして勝ち得て、藝范の耳目を聳やかせた。それから毎年、院展は、全國に持ち廻はられて、全國的に反響を得たが、一方では『もうろう派』など、唱へられて賞讃の聲と共に、官僚派からは異端視されて目に見えぬ迫害も受けねばならなかつた。

大觀はそのなかにあつて、絶えず負けぬ氣で押して、年毎に大作、力作を發表して、大いに氣焰を擧げたが、明治三十六年一月には、盟友菱田春草と共に印度に遊んだ。そして

一年にして歸來すると、その秋、第十五回繪畫共進會に『釋迦父に逢ふ』を出品し、畫壇に大きな波紋を投じた。

この新しい畫風に對しては褒貶が相半ばしたが、會ではこれを優賞に擬した。翌年は再び日本を去つて、春草と共に米國に渡り、ヨーロッパを巡歴して三十八年に歸朝した。

憊うして、詩囊を肥しひたすに畫壇に精進してゐる間にも、日本美術院の經營は餘程困難であつた。そして美術學校に正木直彦氏が校長に就任すると、觀山、廣業等の盟友が巧みに説かれて又もや、學校へ去つたりして、岡倉先生のもとに残るものは、後に又復歸した觀山に武山、春草、大觀の四名だつた。院の經營はいよく困迫して、遂に一時は常陸五浦の岡倉氏の別荘に移すこととなり、苦闘の五年が續いた。けれども、大觀の力作をにぶらせるやうなことはなかつた。

明治四十年の文展には『二百十日』を出品して、模様風の新しい畫題を見せて、一作は一作毎に何かの問題を畫壇に投じた。同時に文展の審査員ともなり、同四十二年には、

有名な『流燈』を出品した。

大觀に『鉦鼓洞』の別號があるのは、常陸五浦時代の記念で、それは水戸黃門の命名である五浦の名所の名であつた。

その後の大觀の名は、大正元年に文展で、廣業と共に大きなセンセーションを起した、有名な『瀟湘八景』等は最も問題となつたものである。

憊うして、ストライキ以來師に殉じて、官展に反抗して、飽くまで民間美術界のために氣を吐き通した大觀にも、時の流れは、押しも押されぬ、日本畫壇唯一の大御所として了ふ時が來た。

或時は宮中の御用のために、宮内省の朱塗の自動車を迎へに立つやうな日もあつた。觀山なき後は、固く辭してゐた帝展技藝委員にもなつた。

そして昭和四年には、遂に、苦闘何十年かの院展の引退を聲明し、翌五年には、イタリ

は、美術全權として、國賓の待遇を受けるなど、いよく大家としての貫録を加へた。下谷池の端に、風流で豪華な住居は、畫壇の大御所に適はしい住居だ。

豊太閤が北野の茶會に用ひたと云ふ自在鍵を釣るした下には、贅澤な切爐、刷毛目の茶釜には松風の音をたて、靜かに詩趣を養ふと云ふ近頃の境涯は、功成り名遂げた東洋人らしい落付きぶりである。

技巧よりも氣迫、腕よりも頭、それで描いた繪と云ふのが大觀の特徴とされてゐる。

不羈、飄逸と云ふのも大觀の畫風に對する定評である。その不羈、飄逸の趣きは、大觀が、往來を歩く時にも判ると云ふ人がある。

袴をだらりと垂れて道路に引摺つて歩く、その格好の無雜作には夫人が閉口してゐて、『主人の袴の裾は、ズツクにしやうかと思つてゐます。』と笑はせたことがある位だ。

兵火のなかに、竹籤で生れた大觀、負けじ魂の水戸ッほ大觀が、繪を完成したとも云へる。

關根金次郎

(一) 寶珠花小僧

下總の東葛飾郡二川村大字寶珠花といふ土地は、昔から將棋の盛んなところで、七八つ
 の青漢たれ共まで、王手飛車手、香車の一本槍に眼の色を變へてゐた。こゝへ生れたのが
 關根金次郎だつた。もう、七八つ頃から門前の小僧、習はぬ經を讀んで、泥いぢくりする
 手で駒を弄んだ。金次郎の父の積次郎や、實兄二人は村での指し手であつたといふ。環境
 も手傳つて、小學校へ通ふ頃には王より飛車を大切がる、へボ大人と對戦しても負けな
 かつた。

その頃のまた小學校といふのが、今日のそれと異つて、寺小屋の延長見たいなものであ
 つたし、校長の小美野といふのが下手の横好きと來てゐるので、小學校でありながら將棋
 盤を晝休みに抱へ出して、
 『さあ來い。教へてやるぞ。』

と、校長先生が子供を相手に指したやうな有様で、ことに金次郎は他の子供に一頭地を
 抜き強かつたから、

『金公、一番。もう、一番。』

と、校長は挑みかゝるのであつた。この頃寶珠花には金子新藏、安達忠治こと通稱飯田
 の老人など云はれる強いのが居た。それへ學校から歸るとすぐ金次郎は駈けつけて、

『叔父さん、教へておくれよ。』

と、教へて貰つたので、その上達振りは非常なものであつた。

『こいつは、今に立派な將棋さしになるこたア疑ひなしだ。』

師匠連は神童ぶりに舌を巻いた。金次郎は一生懸命だつた。そこで初め二枚落して差し
 て貰つてゐた小美野校長も、いつの間にか金次郎の方が上手になつて、逆に二枚落で差す
 やうになつた。それは金次郎の十歳頃のことだ、かうなると子供心にもうれしくてたまら
 ないうへに、

『偉い子供が生れたものだ。』

『末の見込みはあるぞ。』

『みつちり稽古しろ。』

村の者は嘸して立てる。もとで入らずの油をたつぷりかける。これでは本人夢中にならずには居られない。

『よし来た。』

とばかりで、暇さへあると、相手撰ばず勝負をいどみかゝつた。そして、つひには附近の村々へまで、ちびの将棋さし金次郎は遠征するやうになつた。しまひには學校へ行く振りして、辨當をぶらさげそこら中を差して歩いた。

『金も大分上手になつたよ。』

初めのうちは、父親も自分が好きな道のことゝて、金次郎の評判に小鼻をうごめかしてゐるが、學校まで休むことを知ると、

『い、こりやいけない。』

と、叱言をいふやうになつたが、金次郎は相變らず夢中だつたので、

『こりや學問が嫌ひなせるだらう。』

と、近くの町へ金次郎を丁稚奉公にやつてしまつた。ところが丁稚になつた當人は、それが戒めとは思はなかつたので、暇さへあると將棋にかじりついたはいゝが、そのために店は失敗つて、ちよつとの間に呉服屋、菓子屋、酒屋に金物屋といふ風に十二三軒渡り歩いた。まるで、下手の差す將棋の王さま見たいで、逃げ出してばかりゐた。

『そんなに將棋が好きなのなら。』

父はとう／＼これを見て根負けしてしまつた。そして、家に連れ戻つて金次郎のなすがまゝにさせた。

『しめたぞ。』

とばかりに金次郎は、それから天下晴れて研究することができたので、その上達は一段

と見るべきものがあつた。そして、いつしか寶珠花小僧と仇名され、近村誰れ知らぬ者もない少年將棋さしになつたところ、

『一つ呼んで見ようぢやないか。』

と、五里、十里離れた土地からわざわざ寶珠花小僧の金次郎は呼び迎へられ、十二歳のときには初段ほどの實力となつた。

『田舎で修業したつてつまらない。江戸へ出たいなあ。江戸へ。』

腕がすゝむにつれてこんな志望が湧いて來た。そして、少年の身の健氣にも、將棋修業のために村を出て、當時の名人伊藤宗印の門を敲いた。

伊藤宗印は前名を上野房次郎といつた人で、幕末の天野宗歩と共に稱せられた先生である。それへ金次郎は最初に四枚落ちで教授を受けたが、田舎の草角力の金次郎、どうしても叶はなかつた。三番手合せの最初二番は苦もなくころりとやられ、最後の一番に花をもたせて勝たして貰つた。

『俺の腕なんか役に立たぬ。』

田舎角力の横綱金次郎の、天狗鼻はポツキリとへし折られてしまつたと同時に、これが非常な藥となつたことは云ふまでもなかつた。

『こんなことぢや天下の棋客にはなれないぞ。』

と悟を開くと、それから四年といふものは東京へとどまつて、各所の會所の先生の小使同様にして働き、やつと湖口を凌いで夜となく晝となく、一生懸命に勉強して、四年の後にはどうやら二段ほどの腕に進境したのであつた。

それは、ちやうど十六歳になつたときのこと、故郷の寶珠花へ歸つて見ると、もう金次郎の敵になり得るものはなかつた。一年ばかりぶら／＼してゐるが、

『こんなことでは上手にはなれない。』

と、十七歳の春、故郷を飛び出してしまつた。その目的は將棋遍歴の旅であつた。十七の少年棋客の足は甲州路へ、それから信州から上州、野州から奥州へと心のまゝに旅をつ

づけたが、年若な金次郎は旅慣れなかつたので、金のあるときには思はず太腹になつて使つた揚句は、折角、持つてゐた路銀も使ひはたして、またゝく間にスツカラカンになつてしまつたが、さうなると反つて度胸は据つて、

『糞、へこたれるもんかい。』

行けるところまでのして見ようといふ、やゝ捨て鉢氣味も湧いて來た。それは、あまりに年の若かつたせるもある。そして、將棋の對手を求めるといふよりも、一宿一飯へありつくことを考へ、行くさきぐで相手撰ばずさしまくつたので、いつしか勝負度胸ができて來た。後年、金次郎の實力をつけるうへにこれが非常に役立つたことはいふまでもなかつた。

日光から足尾へ、熊の出るといふ夜道をかけたのは、金次郎が故郷を出て二年目の夏の眞盛りであつた。山路を獨り越え有名な白河の關へ迎りつゝいたその姿は、炎天下に笠も冠らず革鞋をはかうにも買ふ金もなく、垢と汗にまみれたみすぼらしい姿で、食はず飲まず

の旅であつたから、腹に力がなく足はよろゝ、木の枝を折つて背中にくりつけて烈日をさけ、水をのんでは草や木の根を嚙つて歩いたが、暑さと空腹と疲れに、眼はくらんで來て、しまひにはふらゝと道ばたにぶつ倒れてしまつた。その刹那だ。

『おやつ。』

と、金次郎は起き直つて、じつと四方を見廻して、思はず双手を働かせ、いきなりもぎとつたのは瓜であつた。——金次郎は知らぬまに瓜畑へぶつ倒れてゐたのであつた。大きな一と抱へもあらうと思はれる、立派な瓜がごろゝころがつてゐる。それが目についたのは、一つ二つ夢中に嚙つた後であつた。瓜畑に履を入れないどころか、金次郎は胴體を入れて貪り食つた。五六本も嚙つてやつと人心ついてから氣のついたのは、皮をそこらに吐き散らしておくと、瓜泥棒したことが發覺するといふことで、早速、皮を土の中に埋めそれから皮ごと泥のついたのをまた嚙つた。

『やつと腹はできたぞ。』

と呟いた。さて、腹ができて見ると、もし立つたところを他人に見られては大變だとかかり、瓜畑の中を四つ這ひに這つて逃げ出した。

これも、やつぱりその當時のことで、金次郎が、上州の片田舎へたどりついたときのこと、将棋好きな人の家へ草鞋を脱ぎ、主人と二三局を對局して、盤を片づけた後、
『まあ、一つ。』

と出されたのは酒であつた。酒なら好きで普通だつたら相手になれたのだが、このときも、金次郎は一文なしの旅を二三日前からつゞけ、おまけに前の夜からは吞まず食はず、夜びて歩いたといふ御難行の翌る日だつたので、二三杯吞むと體へひどくこたへた。そして、

『御免。』

とふらくして便所へ立つたが、何時までしても金次郎が座敷へ歸つて來ないので、
『どうしたのだらう。』

と、主人が行つて見ると便所の中で蟻のやうな齟が聞えた。

『おやつ。』

と戸を開けば金次郎は、畢かくしにしがみついて、前後不覺にぐつすり眠込んでゐたのである。疲勞と空腹とごつちやのところへつきこんだ酒のため、それが一時に出たからであつた。

『はッはムムム。』

主人はあまりをかしかつたので、大聲に笑ふと、それで眼のさめた金次郎は、面目なさに便所から這ひ出すやうにして、

『實は二三日といふものは、吞まず食はずで旅をつゞけましたので、この始末でございませう。』

と、御難の旅をぶちまけると、主人も苦勞人だつたので、

『そりやお氣の毒なことだ。そんなことならまあ、ゆつくりなさい。』

と、かべつて同情を寄せてくれたので、金次郎は吻つとしたのであつた。

(二) 禪の手土産

金次郎は負け嫌ひであつた。勝負には全力をあげてたとひ負けるにしても、中途で駒を捨てはしなかつた。そこに妥協とか相手に花をもたせるとかいふことをしなかつたので、『この男はいけない。』

と毛嫌ひされ、泊めて貰ひたいと思つても、やつと一飯を振舞はれたゞけで、路用一文も貰へず追ひ拂はれたことは、一度や二度ではなかつた。でも金次郎は決して、そんなことを苦にしない。平氣で旅をつゞけた。

この時代、遊歴して土地々々の好棋家を訪ふときには、何か手土産の印として持つてゆくの習慣だつた。ちやうど俠客たちのやうに一本の手拭を、形ばかり差し出して挨拶して、それを相手が戻したものを、また、次ぎに持つて行つた。金次郎は苦しい旅だつたの

で、一本の手拭さへ買ふ金がなかつた。

『困つたなあ。』

と、その手土産をどうしようかと踏ばたの石のうへに腰を下ろして思案した。やがて二ツコリして、

『さうだ、あつたぞ。』

と、中腰に立ちあがり手を股間につゝ込んで、するゝと引き出したのは、二三日前やつとのことを買つてしめた禪である。

『いいつだ。』

と、木かげをチヨロ／＼流れる小川の畔に行つて、ごし／＼と洗濯してから石の上へひろげ、乾くのを待つて丁寧に皺をのばし、手拭のやうに小さくたゝみ、懐中へ入れて、行くさき／＼で、

『ほんの手土産の印です。』

と、すましてそれを出した。

『それには及びませぬ。』

きつと、相手はかへしてくれたので、いゝ氣になつて、禪を鹿爪らしく擔ぎ廻つてゐたが、あるとき、また、例のやうに將棋好きの人の家をたづねると、生憎なことに主人は留守で、内儀が出て來た。金次郎は禪を例のやうに出して挨拶すると、

『左様でございますか。亭主が歸つて來ましたら、このことを申上げます。』

と云つたきり、路用は一文も出さないやうへに、大切な禪まで押しいたゞいてしまひこみ戻してくれなかつた。困つたのは金次郎であつた。

『そりや禪です。』

といふことはできず、取られたまゝ金次郎はホウ／＼の態でその家を逃げ出したが、しばらくの間は、このために禪なしで旅をつゞけた。

懷中は無一文、どうにもかうにもならなかつた。腹は空いて來る。何か賣るものはない

かと、體を見廻すと、ふと氣がついたのは縮緬の繻絆の袖であつた。

『これを賣らう。』

と考へたが、知らぬ土地で誰れも買つてくれるものはなかつた。これには困つてとぼとぼと歩いてゐると、目についたのは駐在所であつた。

『さうだ。巡查へ頼んで證明して貰つたら買ひ手もあらう。』

と、金次郎は駐在所へ駆け込んで、巡查に事情を打ち明けて、

『さういふ次第ですから、この袖を賣りたいのですが、誰れも怪しんで、買つてくれません。どうか、御同情の程を願ひます。』

と云つた。

『そりや困るだらう。よし、何とかしてやらう。』

親切な巡查だつた。金次郎へ同情して、片袖だけ村の者に世話してくれたので、やつとのこと天保錢一枚にありつけ、それで、久し振りに飢ゑを凌いだこともあつた。また、金

が一文もなくなり、渡しの舟賃も拂へないので、

『構ふものか。』

と素裸體となり着物を頭へむすびつけて泳ぎ渡つたり、無一文の者と判つて夜半に、

『出て行きやがれ。』

と、折角、泊まつた宿屋を叩き出され野宿したこともあつたが、金次郎の求道心は衰へなかつた。空腹をかゝへ歩きながらも、

『あの手はかうさすと、相手はどうさすだらう？』

手を空に動かし、心の盤に駒を並べ、工夫をつゞけて行つたので、その上達には目ざましいものがあつた。

武州八王子一の指し手と云はれた寺田淺次郎といふ人の食客になつたのは、金次郎が二十のときであつた。そこへ、ふらりと尋ねて來たのは棋級三段、武内萬平といふ遊歴の棋客であつた。

『なんのことがあるものか。きつと、勝つて見せるぞ。』

金次郎と武内が手合せすることになると、血氣旺んな向不見な、生意氣盛んな年の金次郎は、手合せしない前から、側の者へ法螺を吹き立てた。

『あんな人は、まあ。私の敵ではありませんよ。きつと、ペシヤンコにして御目にかけてます。』

『ほんとですかい。金次郎さん。』

『念には及びませんよ。』

と、金次郎は、大きなことを云つて、武内萬平と手合せして見ると、またゝく間に二番つゞけてころりと敗かされてしまつた。それはあまりに呆氣なかつた。大言壯語の手前、金次郎の面目といふものはない。

『逃げるんだ。それより外に方法はない、さうだ、逃げるんだ。』

かう思つた金次郎は、夜中にそうツと戸をあけて、寺田淺次郎の家を夜逃げしてしまつ

た。

この時分、信州の上諏訪へ千野鎌藏といふ鎗術の先生が居た。この人は将棋も三段近くの腕前があつた。そこへ、金次郎が訪ねて行くと、

『若手の棋士が遊歴した。』

と、噂が立つて、田舎には珍らしい盛大な将棋會が開かれ、金次郎は正客として招かれることになつた。さうなると紋附羽織がいるのだつたが、貧乏棋士にはそれが無い。

『どうしよう。』

と、やたらに氣をもんでゐるところへ、親切な人があつて、

『これを。』

と、紋附羽織を貸してくれた。

『有難うございます。』

喜んで金次郎が着て見ると、その羽織は馬鹿に大きくて、袖はだらりと手先まで覆ひか

くして、裾は長くてまるで袋を子供が冠つたやうに大きかつた。坐つたときはさうでもないが、立つて歩くとなると、だぶ／＼して二目とは見られなかつた。

『ないよりはました。』

このぶざまな羽織を一着に及んで會場へと押し出したまではよかつたが、さすたびに指さきまでたれさがる羽織の袖口が氣になり、左手で脇の下へたぐり込むやうにして、す

ました顔で右手で駒を使つたが、これは金次郎も弱つてしまつた。満座の中でし

初日には千野鎌藏と對局したが、見事初對局に中押しでまけてしまつた。満座の中でも

かも中押しといふ大敗北だから、金次郎はさすがに面目なかつたが、

「暑くてたまりません、失禮。」

と云つて、荷厄介の羽織を脱いで盤に向つた。今日こそ、棋士としての面目が立つか立たぬかの岐れ目、さすがに精神を統一してかゝつた。

ところが、またもや形勢不利、中盤すぎから、ざりく指しこまれ、殆ど七分通りの負け戦となつた。

「これは、羽織のせるでなかつた。やつぱり俺の腕が未熟だつたからだ。」

そこへ氣がついた金次郎の苦しさ、局面をどうかして展開させようと考へるために、何れとなく便所へ立ち、そこで考へたものゝいゝ策戦はうかんで來なかつた。

この金次郎の苦しみを看破したのは千野であつた。さすがに鎗術の先生、武士は情を知つてゐた。そして、この勝負は金次郎へ勝ちを、わざと譲つてくれたので、

「有難い。」

と、金次郎は心の中で手を合せ拜んだのであつた。つぶれかけた面目もやつと保つこと

ができた。そして、そこで、しばらくとどまつて稽古したことは云ふまでもない。

(三) 東伯と初対局

金次郎はそれからも三ヶ年餘、苦しい遊歴をつゞけて二十三のときやゝ自信がついたので久し振りに東京へ歸つて師匠伊藤宗印のところへ戻つて來て教を乞ふやうになつた。

「お前は上達したなあ。」

と、褒められて、四段の免状を授かつたので、もう、空き腹をかゝへるやうなことはなかつたが、

「茶をくれ。」

「炭をこゝへ。」

と、伊藤門下の者たちは、金次郎をこき使ふのであつた。

「何に糞。」

表にこそ現はさないが、負けきらひな金次郎は、今に見返してやるから見てるやがれと心をといだ。腕にみがきをかけることを忘れなかつた。

『しばらく、上方筋を遊んで来たらどうだい。』

金次郎が二十四のとき、師匠の伊藤がすゝめたので、すぐにこの旅へのぼつた。東海道すぢの棋客をたづね、将棋の盛んな名古屋へついた。

こゝには當時、五段の中田猪登松、同段の内山庄太郎、同段岩間宗八、六段の小菅劍之助、五段飯島瀧水、三段津田富士、三段山田柁吉、二段成田吉兵衛の錚々たる棋客が居た。

また、素人側には五段の山本新次郎、横井鐵次郎、三段吉田太郎といふ面々がづらりと控へ實に名古屋は將棋全盛であつた。金次郎はかうした棋士と、順々に手合せしてから伊勢路へめぐり、美濃を歩いて京都へつき、到るところで名ある棋士と手合せして腕に研ぎをかけ、目ざした土地の大阪へ出ると、西區玉造橋南入る近藤太兵衛といふ義侠なる男の厄介になつて、この近藤が會主となり花里といふ料亭で、初めて、目ざして来た小林東伯

と手合せすることになつた。

この小林東伯は西の重鎮で、東の伊藤宗印と共に、斯道で並び稱せられた關西隨一の大師匠であつた。金次郎の關西遊歴の主眼はこの東伯と對局にあつたので、全力をあげて對局したことは云ふまでもない。このとき、東伯は、金次郎へ角落しで對局した。

『大駒落ちの對局なら、決して負けるやうなことはないぞ、きつと、勝つて見せなきや、一ひつ、つぶし指しにつぶして終へ。』

と、肚をきめてかゝつた金次郎が、いざ盤に向つて見ると、物といふものは思つたやうに行かない。第一局は物の見ごとに呆氣なく、ころりと負けてしまつた。

『今度こそは、きつと。』

第二局の盤に對つて、金次郎は滿腔の心血を注いで、死もの狂ひにかゝつたが、やはり形勢は不利で、どんなことをしてもこれを挽回することはできなかつた。ところが、東伯も思ひやりの深い男だつたので、金次郎の遊歴の旅にある身に、花を持たせたかつたらし

く、初段の伊藤末吉といふ男へ、

『この對局はさしかけにしてはどうかと、東伯先生が仰言つたが。』

と云せた。金次郎はその一言を聞くと、うれしさに打たれ、験の裏は思はず熱くなつて来た。何んといふ花も實もある言葉だ。これに抗ふことは道に外れるが、たとひ惨敗したにしろ、敗勢明かな將棋を、さしかけにして貰つたとは末代まで恥辱と、負けずぎらひの金次郎は、

『御言葉は有難うございますが、是非つゞけて對局を御願ひいたします。』

と、しひて指し切りを頼んだ。

『さうまで云ふなら。』

東伯はやむなくさした。勿論、金次郎はこれまころりと負けてしまつたが、すぐにこの敗局を東京の師匠伊藤宗印へ報告すると折り返して、

『よくやつた。よくまけた。せめて十番の御教授を受けよ。』

と、宗印からの返事があつた。その氣であつた金次郎も、つゞけて教へを乞はうとは思つたものゝ、つひ、きまりも悪かつたので東伯へ頼みこむこともできず、

『残念だが。』

多くの心を残して大阪から四國路へと足を向けた。四國は先代名人の小野五平や、八段の土居市太郎、大崎熊雄や、四宮金吾、齋藤雅雄といふ棋士上知名の士の輩出したところだけに、この將棋は盛であつた。金次郎はぐるりと四國をめぐつて、更に九州に押し渡つた。

そして、長崎にしばらく足をとどめたが、この九州行脚の途中、熊本から鹿児島へ向つたとき掬摸に懐中ものをしてやられ、折角心血を注いでさした、これまでの名棋譜を書きとめた控へまでやられたのであつた。

四國から九州への遊歴は三年であつたが、どうしてもあきらめかねたのは、東伯へ二局の敗戦だつたので、

『今一度、御手合せして見たら。』

と、すぐに大阪へとつてかへして、東伯へ對局を頼んだ。今度は角香二度の對局であつたが、三年の間に研いた腕の金次郎は、二度とも勝つた。

このとき、京都の棋客で石川友次郎といふ豪快な、六段の男と會うた。この石川は碁の方は三段で金次郎は不思議とこの石川とは氣が合うて、いつしか水魚の交りを結んでしまつた。

『しつかりやりたまへ。』

『やるとも。』

互ひに勵まして、別れくに遊歴の旅にのぼつたのであつたが、金次郎はこの石川と三十一番さして内、一番だけ負け越してゐた。

この頃、金次郎は一番油のつた時分であつた。石川は豪快で物ごとに淡泊だつたが豪酒を嗜んだ武州の大門町へ行つたときなどは、あまりに酒を呷りつけたので、懷中無一文

となり、着物まで脱いだので、夜中に素裸體のまま、墨丸を、竹の皮に包んで逃げたといふ、奇行に富んだ棋士だつたが、酒のためにつひに倒れてしまつた。

これより前、遊歴中だつた金次郎は、師匠の伊藤宗印が物故したのを聞いた。それは明治二十七年のことであつた。

『あゝ、先生は亡くなられた。先生のゐない東京へ歸りたくない。』

と、すつかり失望した金次郎は、淋しい心を抱いて旅から旅を歩き、神社佛閣に師匠の冥福を禱つた。明治二十九年に、東京へと歸つて來た。すると、實家から六段を許され、ついで七段上手格に進級した。

小野五平の名人披露したのは、明治三十一年のことであつた。この披露會について金次郎にはいろいろな事情から、争ひ將棋を小野五平に挑みかゝつたこともあつた。明治三十七年には八段準名人に進んだが、このとき大橋家からは、八段には免狀を渡さぬ古例だからとどうしても免狀を金次郎へ渡さなかつた。が、明治三十七年の十月に、古文書を調べ

た結果、やつと、免状を渡された。
小野五平が大正十年五月に病歿すると、十三世名人に推擧されたのは、この關根金次郎である。

本因坊秀哉

(一) 浴衣を墨染の秀榮

十四世本因坊秀和の子の秀榮は林家の養子となつてゐたので、三男の秀元が本因坊十六世を繼いでゐるが、秀元は三十一のときに隠退して、家督を兄の秀榮に譲つた。それは明治十七年のことで、十七世本因坊となつた秀榮は、ほんの名ばかりで、火災に逢ひ借金に責められるし、一方には方圓社といふ隆々たる勢ひの敵國があつたし、三百年來傳統の碁界の家元たる坊門には、誰れ一人も寄りつく者もなく、秀榮は日本橋濱町の下宿に住つて、僅かに家傳の由緒書きと、名器淨木の碁盤の二つが手許にあるだけで、

『再び昔の本因坊家にして見せねばならぬのぢや。』

と、苦しみながら碁の研鑽に身命を打ち込んだ。本當に貧乏な生活をしてゐた。その頃のこと、伊香保に滞在してゐた犬養木堂から電報で、

『すくひよ。』

と云つて來たが、行かうにも着替への着物がなく行かれなかつた。これを知つた人が白地の浴衣の着古したのを、

『失禮ですが、お間に合ふなら。』

と恵ぐんでくれたので、早速頂戴して、白地の浴衣ではあまり見すばらしいからと、秀榮は墨を摺つて浴衣を黒々と染め、

『これなら大丈夫。』

と、炎天にそれを乾かし、翌る朝それを着込んで、伊香保の木堂の泊つた旅館へ行つた。

『やあ。よく來てくれた、早速だが……』

待ち兼ねてゐた木堂はすぐに碁盤を抱へ出した。打つてゐるうちに汗がじめくじんで墨はとけ秀榮の肌は眞黒になつた。

『いいつは困つた……』

秀榮は全く参つてしまつてどうしやうもなかつたことがあつた。
 犬養木堂と莊田平五郎の二人はこの貧乏を見るに見兼ねて、時事新報社の福澤捨次郎に
 『何とかしてやつてくれ。』

と云つたのは明治三十七年の夏であつた。そこで、福澤社長は奔走して、日本圍碁會を
 設立し、名譽會員五圓、特別會員三圓、普通會員二圓、臨時會費五十錢の四つに別けて、
 會員募集にかゝると、五圓口の名譽會員には實業界の鏘々たる連中がずらりと顔を並べて
 くれた。別に特別會員は七十人からの大人數となつたので、日本圍碁會はこゝに成立し、
 出席師匠は本因坊秀榮、田村保壽、雁金準一、關源吉、伊藤小太郎、野澤竹朝に助手とし
 ては、井上孝平、吉田きくであつた。場所は當時三菱ヶ原と云はれた三菱銀行の横手に建
 てられた煉瓦長屋の一棟で、家賃は四十五圓であつた。愈々、會が成立すると時事新報社
 から註文として、

『田村保壽と手合せして貰ひたい。』

といふのであつた。秀榮は瘦せて鶴のやうな體つきで頗る神經過敏であつたため、碁は
 教授だけで手合ひは一切せぬことにきめてあつたが、

『日本圍碁會を開設する門出を飾るために、是非やつて貰ひたい。勝負して傷がつくとい
 ふのなら持碁でもよ。』

と云はれて見ると、秀榮もいやとは云ひかねた。

『持碁はかしいことだか、何とか工夫して見ませう。』

と、承知して田村保壽と二人で天神町の自宅で持碁の工夫をやつた。其席には門人野澤
 竹朝だけ出入を許されてゐた。やつて見ると黒が一目勝になる、劫の工合で強ひて持碁に
 できぬこともなかつたが、見る者が見ると作碁とすぐ看破される。

『高段者ともあるものが作碁を新聞に發表しては體面を汚がす、勝負は時の運として二局
 の眞劍勝負をすることにきめました。』

流石に秀榮でかう云つた、日を定めて交詢社で兩雄は雌雄を決することになつた。見物

には朝吹英二、西尾子爵、元田肇、三井元之助などの日本圍碁會の後援者、その他の朝野名士で交詢社は満員となつた。

名人秀榮對七段田村保壽の碁戰第一局はこの日の午後六時頃、約七時間に亘つて戦はれ秀榮の勝ちとなつた。第二局も一日で打ち切つてまた秀榮は勝つた。これは秀榮としての最後の眞劍勝負であつた。

秀榮は頗る逸事に富んでゐた。嘗て、某華族の邸へ稽古に行つたが、その三太夫は世情に暗い男だつたので、碁打の誰れが行つても、二百疋(五十錢)の包金を薄謝として出た。秀榮もやはり二百疋だつたので、こゝから來てくれと手紙が舞ひ込むと誰れも、

『二百疋の御邸から……』

と、笑つたものであつた。この華族の主人公は世にいふ殿さま氣質で、ある日、秀榮が伺ふとすぐに、

『聖目置いたなら、どんな名人にも負けはせぬ、どうぢや、聖目私が置く、もし、負けた

らこの煙草入れをやらう……』

と、膝元にあつた古渡り珊瑚の緒々に純金の煙管、どう安く見積つても當時の金にして五百圓程の立派なものであつた。平生、五、六目で稽古づけられてゐたので、聖目なら何んのこともないと高を括つた言葉に、秀榮は苦笑を洩らしたが、さあらぬ風に、

『承知いたしました。』

と、打ち始めたが、二局が二局とも殿様はたゞきつけられてしまつて、御機嫌が甚だ悪るかつた。そんなことに頓着なく、

『御約束ですから。』

と、秀榮は煙草入れを掴み、さつさと引き揚げる後姿を、殿様は茫然と見送つた。まさか戻してくれとは云ひかねた。

『吝坊の三太夫がきつと取りかへしに來るぞ。』

秀榮は笑つてゐると、云つたやうに翌朝三太夫はのこゝと秀榮の家によつて來て、

『昨日、殿さまのお煙草入れをお持ち帰りなされたさうですな。』

と顔色を變へて云つた。秀榮は二百疋の仇討ちで、すましたものであつた。

『はい。御約束ですから。』

『二應は拜領するのは苦しいはありませんが、いかにお言葉とは申せ、平素の御恩義もある、わしの手許にそつと戻すが道でありませう、持ち歸るなど以ての外、わしにお戻し下さい。』

『はッはッ、それは殿様の御言葉でありますか。』

『いや。——だが、殿様のお戯れをわしが見のがすことはできませんで、取り戻しに参つた。』

『何を云はつしやる。殿様と約束したものを三太夫たるあなたが勝手に破るといふのは道に外れてゐる——今これを御返しては殿様に失禮にあたりますから、お返しは申しませぬ。』

煙草入はさう欲しくなかつたが、あまりに人を馬鹿にした二百匹が癪に觸つてゐたので三太夫を追ひかへしてしまつた。

『うまくやつたな。』

一山、二百匹で追つたり迎へられたりしてゐた碁打ちたちは聞き傳へて喜び、
『何はしかれ、祝賀會を開かう。』

といふことになつて、秀榮のもとに酒をぶらさげて押しかけたことがあつた。いかに物の安い時代とは云へ、この頃、名ある碁打ちには五圓位は包んだものであつた。だが、秀榮の心は高潔なものでこの二百匹事件などは本心からでなかつた。

あるとき、或人が秀榮にすゝめて、

『岩崎久彌男は碁に興味があるから御紹介しませう。』

と云つた。普通の者なら飛びあがつて、

『よろしく』といふところであつたが、秀榮はさうでなかつた。

『お志は有難いが、富豪のところでは藝人扱ひをされますからね。』
と、一言の下にあつざりと斷つてしまつた。

『成る程、名人の意氣は違つたものだ。』

すゝめた人は感心してしまつた。藝人根性を出してはならぬと、平素、秀榮は門人たちを戒めてゐた。

秀榮が名人に昇格した披露會は、明治三十九年に江東中村樓で催された。すると、敵國の方圓社社長巖崎健造から、秀榮の名人昇格に、反對の意を含んだ手合せの申込みがあつた。

これは昔から拒むことはできない争碁であつたが、今はさうした慣例に拘はる責任もない。しかし、かう挑戦されて見ると秀榮としても黙つてゐることはできなかつた。

『自分は虚弱、そこを知つて健造は、手合せを申込んだのだ。彼は有名な長碁、碁を争ふといふよりも體力を争ふやうなものである。さうなると命賭けだ。命を賭けてまで決戦す

る必要はない。』

と思つて、巖崎健造へあてゝ、然るべき名代と決戦してくれと手紙をやつた。

『はゝあ、田村保壽を秀榮は名代にするのであらう。それでは争碁にならぬ。こちらから御免ぢや。』

健造はかう云つたので、この争碁のことは沙汰やみになつた。このとき健造は六十五歳だつたが、容貌偉魁、一度に鰻井二つ位はペロリと平げる鐵のやうな體だつたにひきかへて、五十餘歳の秀榮はヒヨロ／＼してゐたので、幾晝夜も打ちつゞけるとなると、秀榮はヘタバツてしまふことは明かであつた。秀榮と健造は明治二十八年頃、中村樓で形式的に手合せし、打ち掛けのまゝ別れて以來、手合せしたことがなかつた。秀榮の名人に昇格したのを異議を申立たのは健造だつた一人で、當時の高段中、秀榮に對して定先の資格を保つたのは田村保壽七段唯一人で、中川龜三郎、廣瀬平治郎の如きは先二。雁金準一は定二であつたから、名人昇格は當然のことで何も云ふものがなかつた。

巖崎健造は方圓社を率ゐて、一方の雄を唱へてゐた。人に云はせると傲岸であるとも、また親分肌の男とも云はれた。争碁を申込んだのは方圓社長といふ名分上、やむなくやつたらしかつた。健造は豊多摩郡某村出身の男で、圍碁修業中は府下新座郡新倉村の東福寺に寄宿した、住職實願和尚とは俗縁のつながりもあり、また、互先の碁敵であつたので暇さへあるとバチリ／＼やつた。ある日のことであつた。

『このまゝでは面白くない。何か賭けてやりませう。』

『よし、晩飯を賭けよう。』

和尚も面白い坊主であつた。晩飯を賭けて打つて見ると健造は幾番か打ち勝つて、

『どんなもんだい。和尚に一粒も飯は食せぬぞ——。』

と、やたらに詰めこみ、帯をゆるめたところへ、

『今晚は——。』

とやつて來たのは檀家から蕎麥一重ねを運んで來た男であつた。それを見ると和尚はニ

ヤリとして、

『拙老は飯は食ふことができないから蕎麥をやるのだ、健さん、どうだな、一つやりなさらんか。』

つる／＼とうまさうにすゝつた和尚は、既にこの蕎麥を來ることを知つてゐて、健造を一杯はめたのであつた。

『畜生……。』

健造はうらめしさうな顔をした。啜らうにも腹一杯でどうにもならなかつた。いつか仇をと食物の意恨は、この年の大晦日まで持ち越され、この午後になると、

『今日は打ち納め、敗けたものは元旦は斷絶ちとしようぢやありませんか。』

と、健造は切り出した。

『よからう。』

和尚は碁盤に對つた、腹に一物ある健造はわざと負け越した。元旦になると和尚は雑煮

をつくりながら、

『健さんは今日隣だち、雑煮は一口も箸をつけることができんならう。』

『えー。』

と云つて、健造は懐から三盆白の砂糖を出して餅を焼き、うまさうに食ひ始めたのを見て、

『やつ、やられたなつ……蕎麥の仇討ちを元旦にやつたか、うわツはー。』

と、和尚は剃り立ての青入道をつるりと撫でた。

この巖崎健造と田村保壽の二人を、當時碁打たちに取つて唯一なパトロンの、高田商會主の夫人民子が、自分の宅に招いて對局させたことがあつた。

この對局は一局に三晝夜もかゝつて、つひに打ちかけになつてしまつたが、巖崎は偉大な體の持主の上に我慢強いにひきかへて、保壽（後の名人秀哉）は僅かに十貫内外の小男で、二人が盤にかじりついた姿は、皮肉にもソマトーゼを呑んだ人、呑まぬ人と云つたや

うな光景で、巖崎は頑健な體であつたから體力で勝たうといふ策戦か、朝十時から考へ初めて、夕方の五時頃まで盤を睨み据ゑ一石も打たないこともあつた。

『これでは田村さんがたまるまい。』

かう思つたのは民子夫人で、なるべく消化のいゝ榮養に富んだものを、心をこめて作つた料理を出すと、巖崎はべろ／＼と平らげてけろりかんとしてゐるが、田村保壽は出した半分もたべきれずに悄然としてゐた。

七時間もの間一石も打たぬ巖崎は、眼をつぶつて考へ込むかと思つて見ると今度は庭を眺め扇をパチパチ鳴らして盤面を睨み、何だか外のことでも考へてゐるやうであつた。

どんな氣持ちで盤に對つたのか、巖崎ならでは局外者には判らなかつた——打つ氣か打たぬ氣か——弱い田村はこの長い間の啞手合せにつき合せられて、一晝夜、二晝夜はすぎたが、碁は更らに進まなかつた。三日目になると田村はへト／＼になつて、つひに脇掛にもたれて、ぐつすりと眠つてしまつた。それでこの碁は打ち掛けになつたが、巖崎の方

はケロリとして、その足で我家に歸り碁の指南をしたといふことであつた。

(一) 秀榮から叱られた雁金

明治三十八年であつた。この頃、時事新報では本因坊と方圓社兩派の敗退碁を掲載して講評は名人秀榮と、方圓社長巖崎健造とが交互にやつた。このとき七段田村保壽と雁金準一の新聞碁の敗退講評を聴くため、時事新報記者が秀榮を訪ねると、

『これは申譯もない碁を打つたものだ。よく調べて御返事する。』

と、八百長碁であることを發見して秀榮は答へた、秀榮が碁譜を前に自分で打つて見ると、田村雁金二人の特色はなく、持碁ではあつたといふものゝ黒の方が飽くまで優勢であり、作りあげて見ると黒が一目勝ちになつてゐるものが持碁になつてゐる不思議であつた。

『何といふ碁ぢや、保壽がどんな智慧を絞つても挽回の望みなく雁金必勝の碁だ。雁金はわしが望みをかけて方圓社を退社させた男。これが碁を打つとは考へねばならぬ、きつと

何か仔細があるぞ。』

と、すぐに雁金を呼んで碁譜をつきつけた秀榮は聲をはげまして、

『この碁はどうしたのです？』

と詰問した。雁金準一の顔色はさつと變つてしまつた。——準一は江戸の生れで、五つ のときから父が冗談半分に教へたのが、天才を發揮させる最初であつた。十四五の頃は禪家の空門に入つて、初段近い腕前に進境してゐた。

伊藤博文に知られたのは、明治二十六年方圓社に碁を學んでゐたときであつた。それから日清戦争のときには、伊藤博文に従つて廣島に行き、公務の餘暇には碁の相手をしてゐた。伊藤博文は雁金を碁打小僧と仇名して、貴顯紳士の間を引張り歩いた。その生家は貧乏で母一人の腕では一家が立ち行かなかつたので、伊藤に暇を貰ひ十八歳のとき本郷駒込西片町に圍碁稽古場の看板を擧げた。父は病床にあつたが、準一が生涯を碁に捧げる決心を聞き、方圓社の社長中川龜三郎の内弟子となつた。三十一年には二段に進んだ。